

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告 98

富山市内遺跡発掘調査概要 21

ともさか
—友坂遺跡—

2019

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告 98

富山市内遺跡発掘調査概要 21

ともさか
—友坂遺跡—

2019

富山市教育委員会

例　　言

1 本書は、個人住宅建築に先立ち平成30年度に実施した富山市婦中町友坂地内における友坂遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は、富山市教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けて実施した。

3 本書で報告する遺跡の概要是次のとおりである。

遺跡所在地　　富山市婦中町友坂地内

調査面積　　49.12 m²

発掘作業期間　平成30年6月12日～平成30年6月29日

整理作業期間　平成30年7月2日～平成31年3月29日

担当者　　富山市教育委員会埋蔵文化財センター 主査学芸員 野垣好史

同　　　　　嘱託 宮田康之

4 本書の執筆は、第3章第3節・第5章第2節を宮田が、その他を野垣が行った。文責は文末に示した。編集は野垣が行った。

5 自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボ東海支店とパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、第4章に成果を掲載した。

6 現地調査から報告書作成にあたり、次の方々よりご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表する（五十音順・敬称略）。

堺 博昭 塩田 諭 増渕佳子 山田方輝

7 出土遺物・原図・写真は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

1 本書で用いた座標は世界測地系第VII系である。方位は真北、水平水準は海拔高である。

2 遺構は、種別を示す以下の記号と番号の組合せで標記した。番号は遺構種別にかかわらず01からの通し番号を付した。

SB（掘立柱建物） SD（溝） SE（井戸） SK（土坑） SP（ピット） SX（不明遺構）

3 土層、遺物観察表の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。

4 揿図中の網掛けは次のとおりである。

[■] : 地山 [■] : 油煙

5 参考文献は第5章の後にまとめた。ただし、第4章の自然科学分析は各分析の末尾に掲載した。

6 本文中の参考文献の表記について、一部を次のように略した。

教育委員会→教委　　（公財）富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所→富山県財團

7 第1・4・25図は、富山市基本図をもとに作成した。

目 次

例言・凡例

第1章 調査の経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘作業及び整理等作業の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の方法と成果	8
第1節 調査の方法	8
第2節 層序	9
第3節 遺構	9
第4節 遺物	18
第4章 自然科学分析	30
第1節 放射性炭素年代測定	30
第2節 樹種同定	32
第3節 地山の土壤観察	34
第5章 総括	39
第1節 遺構の変遷からみた友坂遺跡	39
第2節 友坂地区周辺における古代から中世の歴史環境	43
引用・参考文献	46

図 版

報告書抄録

図 目 次

第1図 友坂遺跡調査位置図	2
第2図 友坂遺跡位置図	3
第3図 富山平野の地形分類図	4
第4図 友坂遺跡周辺の遺跡	6
第5図 地山の掘り下げ作業	8
第6図 調査区全体平面図	10
第7図 層序	10
第8図 検出遺構(1)	14
第9図 検出遺構(2)	15
第10図 検出遺構(3)	16
第11図 検出遺構(4)	17
第12図 遺構出土遺物(1)	21
第13図 遺構出土遺物(2) SE27井戸枠	22
第14図 遺構出土遺物(3)	23
第15図 包含層(地山)出土遺物	24
第16図 包含層(地山)・搅乱・試掘調査出土遺物	25
第17図 曆年校正結果	31
第18図 出土木材の光学顕微鏡・走査型電子顕微鏡写真	33
第19図 調査地点周辺の土地条件図	34
第20図 柱状サンプル写真	37
第21図 柱状サンプル観察結果	38
第22図 遺構変遷図	39
第23図 中世における友坂遺跡	42
第24図 熊野神社の鳥居があったと伝わる場所	44
第25図 熊野神社への参道推定図	45

表 目 次

第1表 遺物観察表	26
第2表 測定試料および処理	30
第3表 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果	31
第4表 出土木材の樹種同定結果一覧	32

図版目次

図版1 調査区全景	図版6 遺構(4)
図版2 調査区近景	図版7 遺構出土遺物
図版3 遺構(1)	図版8 遺構・包含層(地山)出土遺物
図版4 遺構(2)	図版9 包含層(地山)・搅乱・試掘調査出土遺物
図版5 遺構(3)	図版10 SE27井戸枠

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

友坂遺跡（市No.2010429）は、地元の住民が遺物を採集したことで確認された。昭和49年刊行の文化庁文化財保護部監修『全国遺跡地図 16 富山県』には既に掲載されており、古くから知られた遺跡である。現在の包蔵地面積は 624,800 m²である。

昭和50年代後半から、各種開発に先立ち試掘調査・本調査が行われてきた。

平成30年4月18日、当該地において個人住宅建築に伴い、埋蔵文化財の所在確認依頼書が提出された。対象地 232 m²全域が埋蔵文化財包蔵地に含まれており、4月27日に試掘調査を実施した。その結果、表土直下において奈良・平安時代を中心とする遺構・遺物を検出した。また、地山にも当該期の遺物が含まれており、対象地全域に遺跡が所在することを確認した。

試掘結果を受け、工事主体者側と遺跡の保護措置について協議した。住宅の基礎工事と地盤改良は、造成盛土内に留めて遺跡を保護することが可能であったが、対象地の北辺・西辺に設置するL形擁壁と排水溝・下水溝部分は、遺跡の損壊を免れなかつたため、記録保存のための発掘調査を行うこととなつた。

文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、平成30年5月17日に工事主体者から提出され、5月18日に富山県教育委員会へ副申した。また、文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の報告は、平成30年6月12日に富山県教育委員会へ提出した。

第2節 発掘作業及び整理等作業の経過

発掘作業 発掘作業は、土木会社に掘削業務を委託し、埋蔵文化財センター職員が常駐して調査の監理にあたつた。作業期間は、平成30年6月12日から6月29日である。

作業開始前に、工事主体者側の建設業者にL形擁壁と排水溝・下水溝掘削にかかる範囲を設定してもらい、双方確認のうえ表土掘削にかかつた。バックホウによる表土掘削は、6月12日から実施し、同日完了した。翌13日から14日に作業員による遺構検出を行つた。遺構埋土と地山が類似している部分は、何度か検出作業を行う必要があつた。これと併行して遺構概略図を作成した。14日から検出した遺構の掘削を開始した。掘削を終えた遺構から順次、断面図・平面図を作成した。測量作業は世界測地系座標により、トータルステーションを用いて行った。

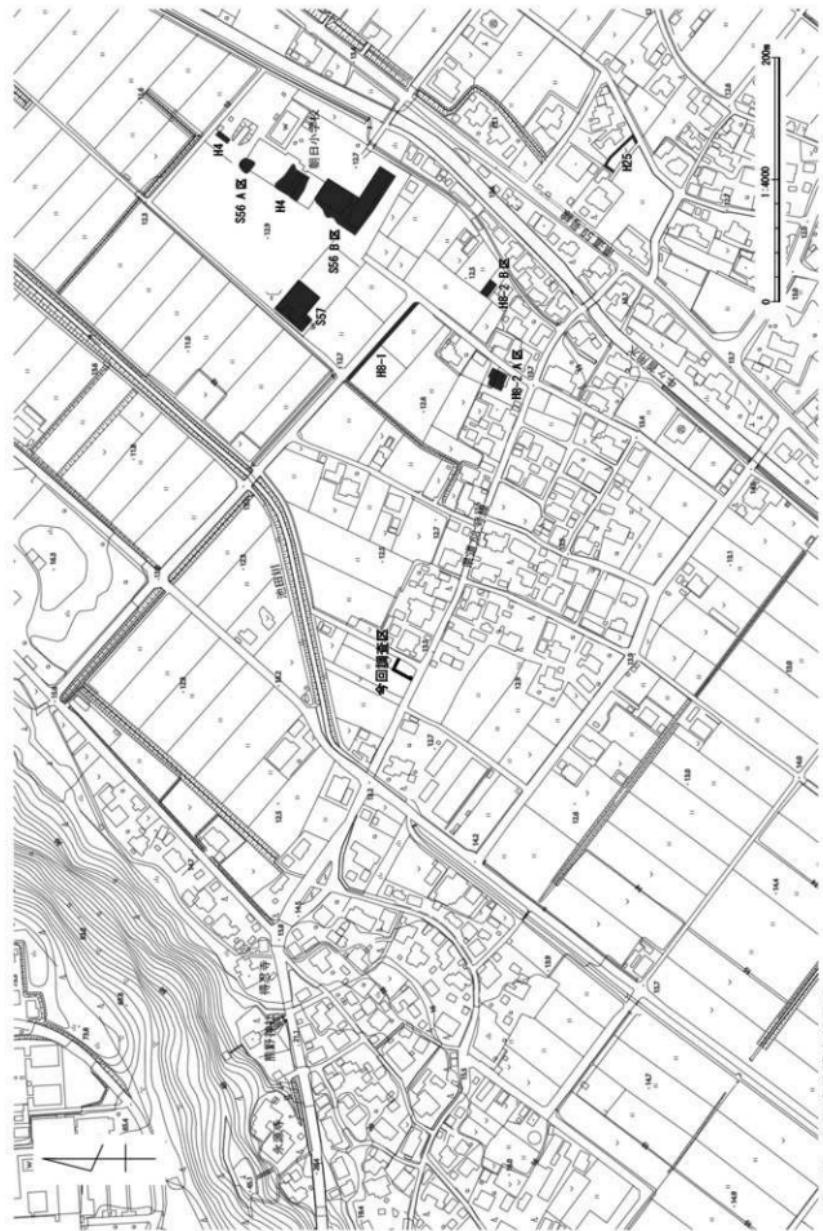
遺構完掘後の6月21日に高所作業車による全景写真撮影を行つた。

その後、地山に包含されている古代遺物の確認と取り上げのため、地山の包含層掘削を行つた。ジョレン・スコップで地山を20cm程度掘り下げながら遺物を取り上げていつた。27日に包含層掘削を終え、29日に現場ハウス・トイレを撤去して発掘作業を完了した。

整理作業 整理作業は平成30年7月から3月まで埋蔵文化財センターにおいて行つた。遺物は遺構出土遺物が少なく、かつ破片が多かつたため、出土遺物の実測にあたつては、口縁部や底部が残るものはできるだけ図化するよう努めた。また、遺構の年代比定や地山土壤の検討のため、自然科学分析を株式会社パレオ・ラボ東海支店とパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。併行して原稿作成、遺物写真撮影を行い、平成31年3月29日に本書を刊行した。

（野垣）

第1図 友坂遺跡調査位置図



第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

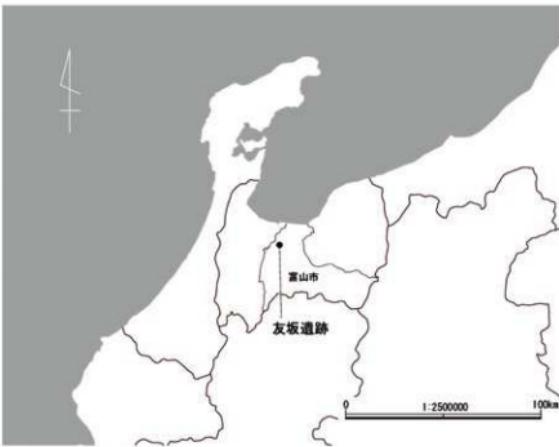
富山市は、平成17年（2005）の市町村合併により、富山県の中央部から南東部まで県域の三分の一近くを占める広大な市域となった。北は富山湾、東は立山連峰、西は丘陵・山村地帯が連なり、南は岐阜県境に接して広大な森林が広がる。遺跡が所在する富山市婦中町友坂地区は、市内北西部の呉羽丘陵東麓付近に位置する。

富山県は、県域の中央を南北に延びる呉羽丘陵によって「呉東」、「呉西」に分けられ、文化や気候面において違いがある。呉東に広がる富山平野は、神通川と常願寺川の流域に形成される。常願寺川は県南東部の山岳地帯に水源をもち、上流部に立山カルデラの大崩壊地があることから莫大な量の砂礫が供給され、広大な扇状地を形成する。神通川扇状地は比較的小さく、下流の富山市街地以北は流路変遷の跡や自然堤防・後背湿地が広がる。呉西の射水平野は、縄文時代前期には海進によって丘陵の裾付近まで海岸線が入り込んでいた。全体的に低湿の海岸平野が広がる。

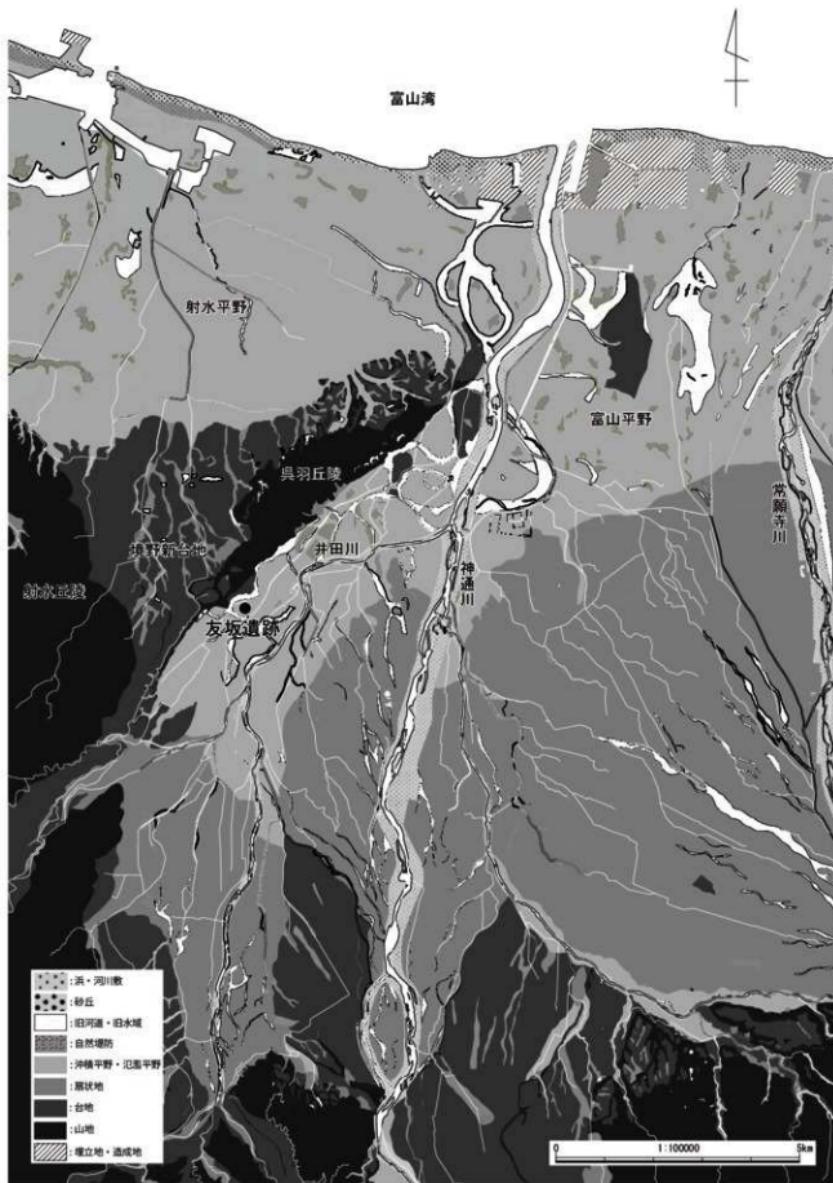
県域を二分する境界である呉羽丘陵は、南西端の富山市境野新から北東端の富山市八ヶ山まで約7kmの長さがある。最大幅約2.5kmで、東斜面は急崖が多いに対し、西斜面は全体的に緩やかで馬背状の尾根がなだらかに続く。最高所は標高145.3mである。丘陵の形成は約100万年前に始まり、隆起により陸化して、50~30万年前には神通川から運ばれた砂礫が堆積した。その後、さらに隆起し、河道は丘陵東側に移り、浸食により直線的な急崖をつくって、ほぼ現在の状態となった（高瀬監修1994）。

友坂遺跡は、250m西側に呉羽丘陵が迫り、東側約1kmには井田川が北流する。標高は約12~13mである。ほ場整備前の地籍図によると、呉羽丘陵の裾に沿って旧河道の痕跡が認められ、現在の友坂集落を抱き込むように蛇行した流路が復元される（婦中町教委1997・第23図）。現在の友坂地区の集落は、呉羽丘陵裾付近にある西側部分とやや離れた東側部分に分かれるが、この間に旧河道が存在した。友坂遺跡は、東の井田川だけでなく、西側もある時期に河道が存在する氾濫原に立地していたことがわかる。

調査区は呉羽丘陵裾から約250m東に位置する平坦地である。調査前は畑地として利用されていた。畑地は、昭和48~51年にはほ場整備が行われ（朝日校下史編纂委員会2001）、現在の状態となったものである。



第2図 友坂遺跡位置図



第3図 富山平野の地形分類図

第2節 歴史的環境

平成31年2月末時点では、富山市には1049ヶ所の遺跡が所在する。友坂遺跡が立地する井田川左岸の平野部と、西側の呉羽丘陵・境野新台地周辺では、立地に対応して遺跡の内容・数が大きく異なる。このうち呉羽丘陵・境野新台地周辺は、富山市の遺跡のおよそ5分の1にあたる約200ヶ所の遺跡がある。県内で最も遺跡が集中する地域のひとつで、旧石器時代から江戸時代まで連続と人為活動の痕跡がみられる。地形変化に富み、遺跡の種類も集落・生産・墳墓・山城等と多様である。一方、井田川左岸の平野部は、古代・中世を中心とする集落や城館・生産遺跡が点在する。

旧石器時代 呉羽丘陵南部から境野新台地周辺に遺跡が点在する。境野新遺跡は石核・剥片が出土し、製作遺跡とみられる（西井・藤田 1976）。向野池遺跡では、縦長剥片素材の周縁調整尖頭器がある（富山市教委 2000a）。北押川B遺跡では、東山系の石刃と搔器、杉久保系のナイフ形石器が出土している（富山市教委 2008a）。また、開ヶ丘中山IV遺跡では関東系の茂呂型ナイフ形石器の出土がある（富山市教委 2001a）。石器の出土数の多い境野新遺跡、北押川B遺跡以外は、完形の石器が単独あるいは少量出土する傾向があり、短期間の行動の痕跡と評価されている（西井・藤田 1976）。なお、向野池遺跡では、県内でも数少ない黒曜石細石刃核が見つかっている（富山市教委 2000a）。

縄文時代 呉羽丘陵の西側に広がる境野新台地周辺で多くの集落遺跡がある。

草創期は、平岡遺跡、千坊山遺跡、新町II遺跡など、南西側の中位段丘で石槍の出土が確認されている。前期も同じく中位段丘で集落遺跡が展開する。北押川C遺跡で竪穴建物が確認されているほか（富山市教委 2003a）、平岡遺跡は、近年の調査で居住域と墓域が同心円状に配置される環状集落が検出された。平岡遺跡は石製品、特に玦状耳飾が多数出土している（富山県財団 2015）。

中期は、西側の高位段丘にある開ヶ丘地区で集落形成が活発になる。池多南遺跡では中期前葉の竪穴建物5棟（富山市教委 2005）、開ヶ丘中山III遺跡では中期前葉～中葉の竪穴建物6棟（富山市教委 2002a・2003b）、開ヶ丘孤谷III遺跡では中期前葉～後葉の竪穴建物75棟と掘立柱建物4棟が検出されている（富山市教委 2003b・2003c・2003d・2004a・2004b）。開ヶ丘孤谷III遺跡では、千葉銚子産琥珀製品が出土している（栗島 2012）。中期後葉になると、高位段丘に形成されていた大規模集落が衰退するとともに、再び低位・中位段丘で小規模集落が展開する。池多東遺跡では竪穴建物2棟（富山市教委 2002b）、上堤池遺跡では竪穴建物1棟が検出されている（富山市教委 1973）。野下・新開遺跡ではこの時期と推定されている落とし穴状遺構がある（富山県財団 2016）。

後期は検出遺構が減少し、空白期に近い状態となる。晩期には再び低位から高位段丘にかけて遺構・遺物がやや増えるが、規模は小さい。

弥生・古墳時代 弥生時代中期以前の遺跡は少なく、後期以降に増加する。向野池遺跡では天王山系土器を伴う竪穴建物が検出されている（富山市教委 2006）。弥生時代後期以降、呉羽丘陵から境野新台地、さらに南の羽根丘陵にかけて多くの墳墓が築かれる。友坂遺跡のすぐ西側にあたる呉羽丘陵の南部においては、杉谷古墳群で四隅突出型墳丘墓を含む弥生時代終末期から古墳時代前期前半の墳墓・古墳が築かれ、杉谷A遺跡では方形周溝墓群から素環頭鉄刀、ヤリガンナ、鉄素材等が出土している（富山市教委 1975）。羽根丘陵では、弥生時代後期から古墳時代前期の集落・墳墓で構成される国史跡王塚・千坊山遺跡群がある。古墳出現期の動向を集落と墳墓両面から追え、四隅突出型墳丘墓も複数確認されている。いずれの地域も方形墓が主体である。

中・後期は呉羽丘陵上を中心に古墳が築かれる。中期は前方後円墳の古沢塚山古墳（41m）がある。呉羽山丘陵No.26号墳は、富山県最後の後期前方後円墳と評価されている（高橋 2007）。後期古墳はほ



1 友坂遺跡 2 楠谷南遺跡 3 古沢・西金屋南跡群 4 センガリ山窓跡 5 白鳥城跡 6 真羽山丘陵古墳群 7 古沢樺山古墳 8 真羽山丘陵No.26号古墳
9 金屋陣の穴標穴墓群 10 金屋南遺跡 11 安田城跡 12 友坂天神遺跡 13 楠谷古墳群 14 彩谷A遺跡 15 境野新道跡 16 向野池遺跡
17 北押川I・幕ノ段遺跡 18 北押川II遺跡 19 北押川IC遺跡 20 境野新南III遺跡 21 池多東遺跡 22 鶴坊山遺跡 23 野下・新間遺跡 24 平岡遺跡
25 平岡家跡群 26 二本櫻III遺跡 26 新町II遺跡 27 各頤寺前遺跡 28 千坊山遺跡 29 下色道遺跡 30 鶴ヶ城跡 31 二本櫻道路

第4図 友坂遺跡周辺の遺跡

かに丘陵北部の金銅装頭椎大刀を出土した呉羽山古墳や番神山横穴墓群（大村 1931）、呉羽丘陵南部の金屋陣の穴横穴墓群（富山市教委 1976）などがある。二本榎遺跡では後期の横穴式石室墳が発掘調査で確認されている（富山市教委 2015）。

古墳時代中期以降の集落の確認例は少ないが、境野新遺跡で竪穴建物 2 棟が検出されている（富山市教委 1974）。至近にある呉羽山丘陵古墳群との関わりが推定される。

古代 呉羽丘陵・境野新台地周辺は、集落とともに製鉄・製陶等の生産遺跡が多数存在する。多様な生産遺跡が展開した地域で、古代越中国における生産の拠点とみられている。

製鉄関連では、池多南遺跡で 8 世紀末の長方形箱型炉（富山市教委 2005）、開ヶ丘中山Ⅲ遺跡（富山市教委 2003b）・御坊山遺跡（富山市教委 2002d）で半地下式円形竪型炉が検出されている。須恵器窯は、低位段丘の古沢・西金屋窯跡群、北押川・墓ノ段遺跡、高位段丘の明神遺跡などで見つかっている。また、向野池遺跡、開ヶ丘中遺跡、御坊山遺跡等では土師器焼成坑が検出されている（富山市教委 2002c・2002f・2003b・2008c）。炭窯や簡易な製炭施設である焼壁土坑も各遺跡で見つかることが多い。栢谷南遺跡で、白鳳期の瓦陶兼業窯が確認されたことも特筆される（富山市教委 2002e）。

集落は、向野池遺跡、開ヶ丘中遺跡、開ヶ丘ヤシキダ遺跡などがある。向野池遺跡では、三面庇付き建物を含む平安期の掘立柱建物群を検出し、郡衙関連の生産にかかわる施設と推定されている（富山市教委 2006）。開ヶ丘中遺跡は、8 世紀後半から 9 世紀前半を中心とする礎石建物や掘立柱建物で構成される集落で、鉄鉢や瓦塔など仏教関連遺物が出土する（富山市教委 2003c）。開ヶ丘ヤシキダ遺跡は、8 世紀後葉から 9 世紀前葉の掘立柱建物・竪穴建物が見つかり、開ヶ丘中遺跡と関係する集落とみられている（富山市教委 2003b）。

井田川左岸の平野部でも集落遺跡が散見される。金屋南遺跡は 9 世紀後半から 10 世紀前半の集落である。川べりで土器祭祀が行われていたとみられている（富山市教委 2007b）。下邑東遺跡では 7 世紀後半～8 世紀と 9 世紀後半～10 世紀の集落が確認された（堀内 1998）。今回報告する友坂遺跡では、朝日小学校近辺の昭和 56・57 年度・平成 4 年度・平成 8 年度の調査で 8 世紀後半の竪穴住居跡、7 世紀後半から 9 世紀初頭の土器廃棄場などを検出している（婦中町教委 1984・1993・1997）。また、平瓦も出土している。なお、本遺跡西側の呉羽丘陵には、延喜式内社に比定されるとの説もある熊野神社とその別当寺である友坂寺が存在した（婦中町教委 1993、第 5 章第 2 節参照）。

中世 中世は、西側の丘陵周辺と東側の平野部を中心に遺跡が展開する。

丘陵周辺は、蓮花寺遺跡で 14 世紀後半から 15 世紀の掘立柱建物が検出され（婦中町教委 1984）、千坊山遺跡では堀・土壘を巡らせる城館跡や塚状遺構が確認されている（婦中町教委 1996）。各願寺前遺跡では 14 世紀から 16 世紀前半の掘立柱建物 6 棟等がある（婦中町教委 2004）。富崎遺跡では 12 世紀と 15 世紀後半～16 世紀の遺構・遺物を確認している（富山市教委 2008b）。また、羽根丘陵上に富崎城跡や長沢城跡などの山城や砦が築かれる。羽根丘陵周辺の遺跡の立地は、富山平野と砺波平野を結ぶ東西ルート、日本海と八尾方面を結ぶ南北ルートの交差点という要衝に位置することが関係するとみられる。

平野部では、友坂遺跡で 12～15 世紀の二重にめぐる溝や土橋等が検出され、居館とみられている（婦中町教委 1984・1993）。また、その周囲にはほぼ同時期の集落遺構も確認されており、長期にわたって居館と集落が併存していた状況が看取できる。室町時代中期の文明年間は、友坂に隣接する下条が小田氏の所領であった。城館は、ほかに安田城跡（国史跡）や鶴ヶ城跡など戦国時代の平城が存在する。金屋南遺跡は、12 世紀から 16 世紀にかけての大規模集落で、14 世紀後半から 15 世紀に鉄物生産が行なわれていた（富山市教委 2007b）。

（野垣）

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

概要 発掘調査は、宅地西辺・北辺のL形擁壁と排水枠・下水枠掘削部分を対象に実施した。調査前に工事主体者側に工事の掘削予定範囲を示してもらい、範囲を双方確認のうえ調査にかかった。

調査完了後は、引き続き工事に入るため埋め戻しは行わず、そのまま現地を引き渡した。

区割 調査区南端から約4mごとに区割を行い、A区からH区を設定した(第6図)。区割にしたがい、遺構検出および地山の包含層掘削の出土遺物を取り上げた。また、第3節の遺構の記述において、遺構の位置を示すために用いた。

発掘作業 表土掘削はバックホウにより行い、排土は横置きした。表土直下に地山が所在しているため、地山直上まで慎重にすき取りを行った。

表土掘削が完了した場所から、ジョレンで人力による遺構検出作業を行った。遺構埋土が地山と類似しており、遺構検出はやや困難を伴った。地山に古代遺物が多く含まれており、遺構検出作業中にも一部出土した。遺物は区割ごとに取り上げた。

遺構掘削は移植ゴテを使用した。基本的に半截して掘り下げ、必要に応じて写真撮影と断面図作成を行い、その後完掘した。

遺構完掘後、地山に含まれている古代遺物の取り上げのため、地山を20cm程度掘り下げた(第5図)。剣スコップ、ジョレンを用いて掘削し、出土した遺物は区割ごとに取り上げた。なお、地山を掘り下げた時点で新たに確認した遺構があったが、これらは下層遺構ではなく、当初の遺構検出作業時に確認できなかったものである。

地下からの湧水はなかったが、隣の水田に張られた水が調査区内に浸透することが何度かあった。その都度、排水しながら作業を行った。

記録作業 図化作業はトータルステーションを用い、全体図は縮尺1/100、平面図・断面図は1/20、井戸の見通し図は1/10で作成した。測量基準は世界測地系第VII系による。写真はデジタル一眼レフカメラで撮影した。遺構完掘後、高所作業車による全景写真撮影を行った。

自然科学分析 遺構出土遺物が多くなったため、遺構の時期比定にあたって、2つの遺構から出土した木材の放射性炭素年代測定を行った。また、同試料を用いて木材の利用状況を推測する樹種同定を行った。さらに、古代遺物を包含する地山の堆積要因を調べるために、自然科学的な観点から土壤観察を行った。

整理作業 土器等がコンテナ5箱、木製品(井戸枠)が1箱出土した。

最初に遺物洗浄と注記等の基礎整理を行った。地山からの出土遺物を中心に、出土量は一定程度あったが、ほぼ破片である。遺跡の全容を把握できるよう、口縁部が残るものだけでなく、その他の部位もある程度の大きさの破片はできるだけ図化した。遺構・遺物のトレースはデジタルトレースで行った。遺物写真撮影はデジタル一眼レフカメラを使用した。



第5図 地山の掘り下げ作業

第2節 層序(第7図)

調査当時は畠で、地表面の標高は12.65mである。

約20cmの耕作土(I層)の直下で地山(II層)を検出した。昭和48~51年のほ場整備で地山の上層部分は削平されていることが推定できる。

地山は黄橙色シルト(II層)である。地山上面において、古代・中世・近世の遺構を検出した。いずれの遺構も同一面での検出である。II層は、遺構の地山であると同時に、土師器・須恵器を中心にして古代遺物を多く含む包含層でもある。そのため遺構完掘後に、遺物の確認と取り上げのためII層を20cm程度、全体的に掘り下げた。第4章第3節の土壤観察によると、II層は氾濫堆積物由来し、人為改変が及んでいる上部と氾濫堆積の痕跡をより残している下部に大別される。また、II層下部は葉理構造から少なくとも3回の氾濫堆積が想定される。II層は平均して20cm程度の厚さがあるが、北東部では約50cmと厚く堆積する。これはII層下にあるIII層の旧地形が北東部に向かって緩やかに落ち込んでいるためである。III層は灰黄褐色砂質土で、部分的に5~10cmの円礫を含む。円礫は特に調査区中央部に多く含まれていた。

(野垣)

第3節 遺構

1 概要

59基の遺構を確認した。内訳は、掘立柱建物(SB)1基、井戸(SE)1基、溝(SD)1条、土坑(SK)9基、ピット(SP)45基、不明遺構(SX)2基である。古代、中世、近世の遺構があり、いずれも同一面で検出した。地山(II層)の出土遺物の年代を考慮すると、古代の遺構は9世紀初頭~前半頃を中心とみられ、一部9世紀後半頃がある。中世の遺構は13世紀、15世紀中葉、16世紀後半、近世の遺構は17世紀後半がある。長期にわたり断続的に遺構が形成されている。

なお、SP49~50、SP52~54、SK55、SP56~57、SD58は、遺物包含層である地山(II層)を掘り下げている最中、あるいはその後に下層で確認した遺構であるが、これは当初の遺構検出でプランを確認できなかったためで、本来は他遺構と同じII層上面から掘り込まれる遺構である。

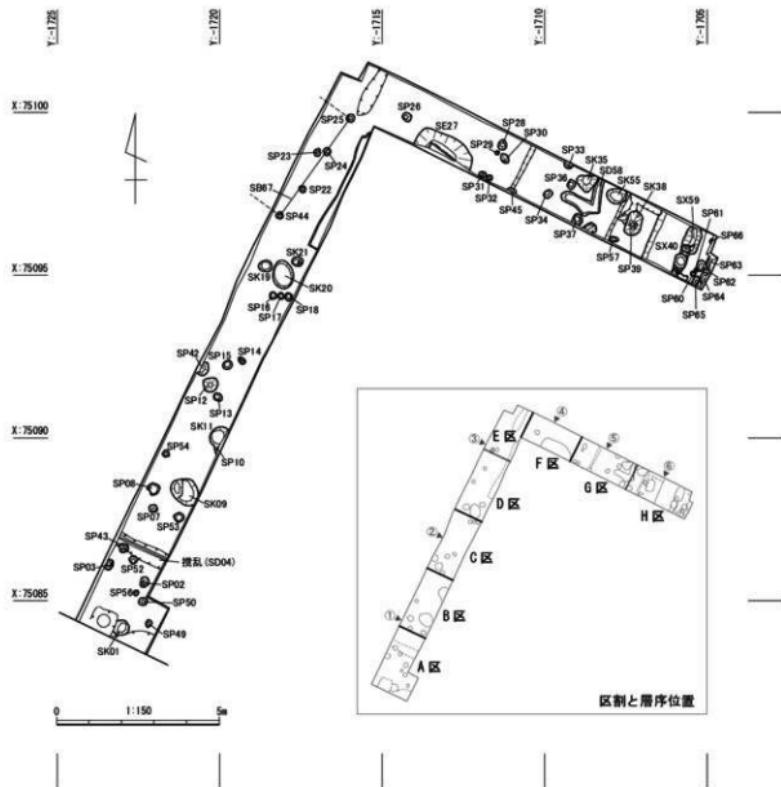
2 掘立柱建物

部分的な検出で、また、柱穴深さや柱間にばらつきがあるため掘立柱建物と認定できるか疑問はあるが、可能性がある遺構として示す。

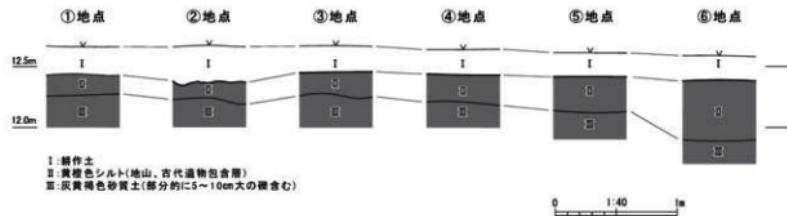
SB67 (第9図) E区・D区で検出した。SP25、SP24、SP22、SP44からなる3間の柱穴列で、軸方向はN-54°-Eである。西側に広がると推定される。総柱建物か側柱建物かは不明である。検出長は3.66mである。柱間距離はSP25-SP24が1.22m、SP24-SP22が1.38m、SP22-SP44が1.06mである。各柱穴の規模は、SP25が長軸0.26m、短軸0.24m、深さ0.45m、SP24が長軸0.25m、短軸0.23m、深さ0.20m、SP22が長軸0.22m、短軸0.20m、深さ0.11m、SP44が径0.22m、深さ0.31mである。各ピットの深さは一定でない。SP24・25から古代の土師器が出土したが、柱穴構造の類例を考慮すると中世の可能性が高いと考える。

3 井戸

SE27 (第10図) F区で、北側の一部のみ検出した。掘り方は隅丸方形で、規模は東西1.89m、南



第6図 調査区全体平面図



第7図 層序

北の検出長 0.62m、深さ 1.15m である。湧水は掘削時にわずかに発生した程度であった。井戸枠は検出面から深さ 0.79m で検出し、規模は東西 0.91m である。横桟と薄い縦板（厚さ 0.6~1.4 cm）で構築される。井戸枠は、鐘方正樹氏の分類による組立て式方形縦板組型 B3 類（鐘方 2003）に該当する。井戸枠材は横桟 3 点と縦板 13 点を確認した。横桟は 3 点のうち 2 点（第 13 図 36・37）を取り上げた。36 は北辺の横桟で、ホゾ穴の痕跡ほか、長さ約 15cm、幅 1.8cm の抉り込みがある。この用途は不明であるが、何らかの転用材である可能性がある。横桟 37 は西辺に位置し、両端にホゾを設ける。縦板は横桟の外側に配置され、13 点を取り上げた。腐朽のためかいずれも上部は残存していない。北辺西側では横桟 36 に組み合う形で縦板 38・44・39 を確認した。北辺東側では縦板 40~43・45 を確認した。これらはそれぞれが一部重なりながら並ぶ。縦板 40 の東隣に縦板 41・43 と続き、その中間奥に縦板 42 がある。また、縦板 43 に一部重なって縦板 45 があり、さらにその東隣に別の縦板 1 点がある。なお、縦板 45 は樹種同定によりスギと判明した。

遺物は土師器、須恵器、青磁、珠洲が出土した。青磁の皿は井戸枠内の深さ 1.04m の灰色粘質土層から出土し、12 世紀後半から 13 世紀前半である。珠洲の擂鉢は井戸枠内埋土である深さ 0.41m の褐色灰色粘質シルト層と深さ 0.13m の灰黄褐色粘質シルト層からそれぞれ出土し、13 世紀前半とみられる。古代の土師器・須恵器も多く出土しているが、中世遺物の存在から時期は 13 世紀前半と捉えられる。なお、井戸枠縦板（第 13 図 45）の放射性炭素年代測定で、989~1039 cal AD (95.4%) と古い年代値が得られた。試料は、最終形成年輪が残っていないため古木効果の影響を受けているとみられる（第 4 章第 1 節参照）。古材を再利用した可能性も考えられる。

4 溝

SD58（第 11 図） G 区で検出した。東西から南北方向へ途中で屈曲する溝である。東西方向の溝は検出長 1.30m、幅 0.49m、深さ 0.11m、南北方向は検出長 1.07m 以上、幅 0.27m、深さ 0.09m である。主軸方向は東西方向が N-64° -W、南北方向が N-18° -E である。土師器、須恵器が出土した。9 世紀初頭～前半とみられる。

5 土 坑

SK01（第 8 図） A 区で検出した。南側と西側の一部は擾乱を受ける。梢円形で、長軸 0.50m 以上、短軸 0.44m 以上、深さ 0.09m である。土師器が出土した。古代の遺構とみられる。

SK09（第 8 図） B 区で検出した。梢円形で、長軸 0.90m 以上、短軸 0.75m、深さ 0.34m である。土師器、須恵器、土錐、銅錢（熙寧元寶）が出土した。中世の遺構とみられる。

SK11（第 8 図） B 区で検出した。円形で、径 0.65m、深さ 0.39m である。重複する SP10 より新しい。古代の土師器、須恵器が出土した。土師器は 10 世紀代とみられるが、出土炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、1436~1480 cal AD (95.4%) の年代が得られ、これが遺構年代を示すと思われる。土師器・須恵器は流れ込みによるものであろう。

SK19（第 9 図） D 区で検出した。梢円形で、長軸 0.42m、短軸 0.37m、深さ 0.24m である。土師器、須恵器、砥石が出土した。9 世紀初頭～前半とみられる。

SK20（第 9 図） D 区で検出した。梢円形で、長軸 0.89m、短軸 0.64m、深さ 0.28m である。土師器、須恵器が出土した。

SK21（第 9 図） D 区で検出した。梢円形で、長軸 0.35m、短軸 0.29m、深さ 0.27m である。土師器、須恵器、越中瀬戸が出土した。17 世紀後半である。

SK35 (第 11 図) G 区で検出した。不整形で、長軸 0.58m、短軸 0.54m、深さ 0.67m である。土師器、須恵器が出土した。9 世紀初頭～前半とみられる。

SK38 (第 11 図) H 区で検出した。楕円形で、長軸 0.76m、短軸 0.47m、深さ 0.58m である。重複する SP39 より古い。土師器、須恵器が出土した。古代の遺構とみられる。

SK55 (第 11 図) H 区で検出した。楕円形で、長軸 0.62m、短軸 0.47m、深さ 0.53m である。土師器、須恵器が出土した。9 世紀初頭～前半とみられる。

6 ピット

SP02 (第 8 図) A 区で検出した。楕円形で、長軸 0.33m、短軸 0.25m、深さ 0.36m である。出土遺物はない。

SP03 (第 8 図) A 区で検出した。楕円形で、長軸 0.33m、深さ 0.11m である。須恵器が出土した。古代の遺構とみられる。

SP07 (第 8 図) B 区で検出した。隅丸方形で、長軸 0.24m、短軸 0.22m、深さ 0.18m である。出土遺物はない。

SP08 (第 8 図) B 区で検出した。不整楕円形で、長軸 0.36m、短軸 0.32m、深さ 0.22m である。土師器が出土した。古代の遺構とみられる。

SP10 (第 8 図) B 区で検出した。重複する SK11 より古い。一部の検出で、深さ 0.23m である。出土遺物はない。

SP12 (第 8 図) C 区で検出した。円形で、径 0.48×0.46m、深さ 0.58m である。土師器が出土した。古代の遺構とみられる。

SP13 (第 8 図) C 区で検出した。楕円形で、長軸 0.29m、短軸 0.23m、深さ 0.31m である。出土遺物はない。

SP14 (第 8 図) C 区で検出した。楕円形で、長軸 0.26m、短軸 0.17m、深さ 0.19m である。出土遺物はない。

SP15 (第 8 図) C 区で検出した。楕円形で、長軸 0.29m、短軸 0.26m、深さ 0.21m である。土師器が出土した。古代の遺構とみられる。

SP16 (第 9 図) C 区で検出した。SP17・18 と隣接して一列に並ぶ。円形で、径 0.22m、深さ 0.25m である。出土遺物はない。

SP17 (第 9 図) C 区で検出した。円形で、径 0.21×0.20m、深さ 0.05m である。出土遺物はない。

SP18 (第 9 図) C 区で検出した。楕円形で、長軸 0.26m、短軸 0.22m、深さ 0.20m である。出土遺物はない。

SP23 (第 9 図) E 区で検出した。楕円形で、長軸 0.24m、短軸 0.20m、深さ 0.11m である。出土遺物はない。

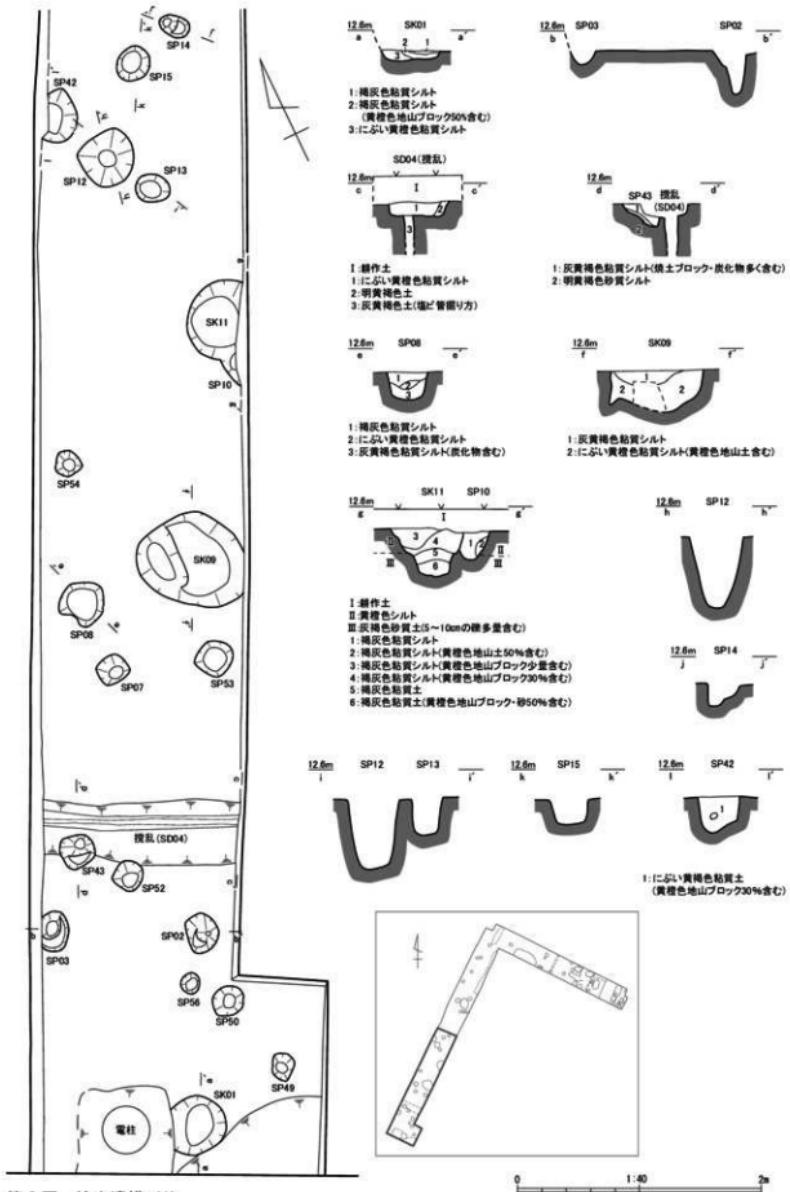
SP26 (第 9 図) F 区で検出した。楕円形で、長軸 0.29m、短軸 0.25m、深さ 0.37m である。出土遺物はない。

SP28 (第 10 図) G 区で検出した。楕円形で、長軸 0.31m、短軸 0.26m、深さ 0.16m である。土師器が出土した。古代の遺構とみられる。

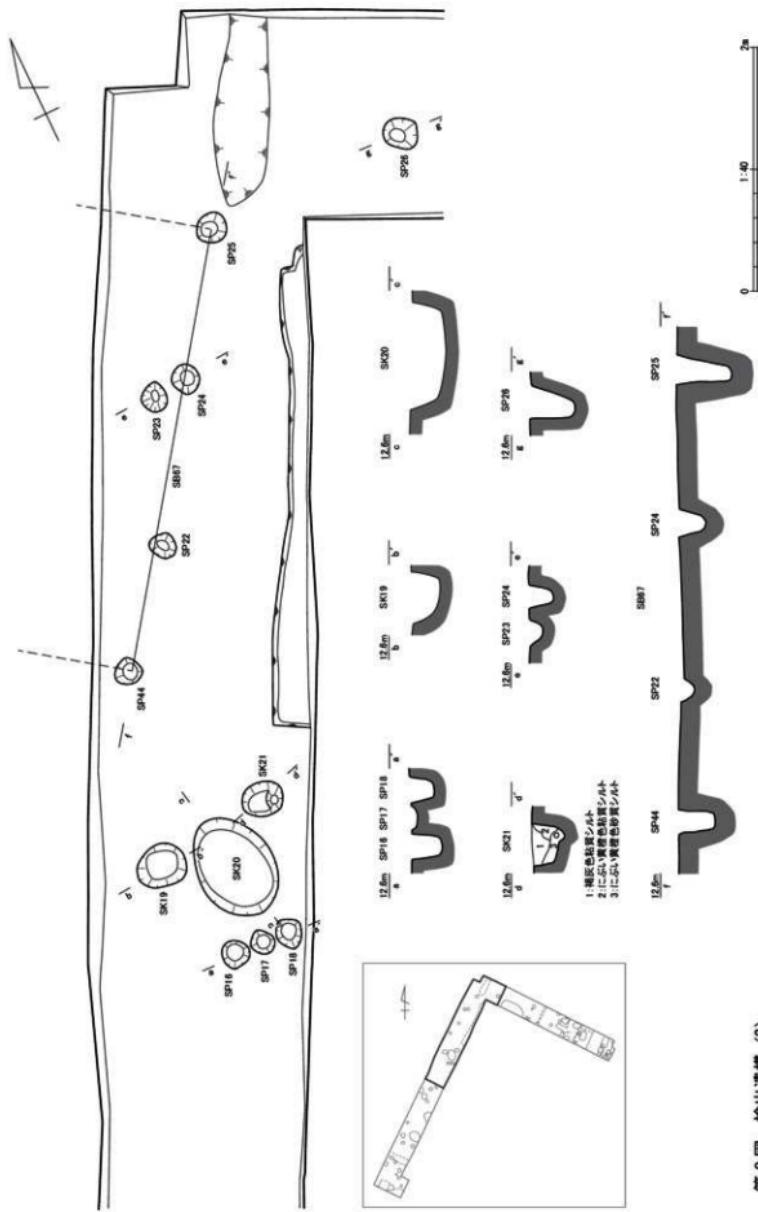
SP29 (第 10 図) G 区で検出した。円形で、径 0.12m、深さ 0.03m 以上である。出土遺物はない。

SP30 (第 10 図) G 区で検出した。楕円形で、長軸 0.33m、短軸 0.24m、深さ 0.17m である。土師器、須恵器が出土した。古代の遺構とみられる。

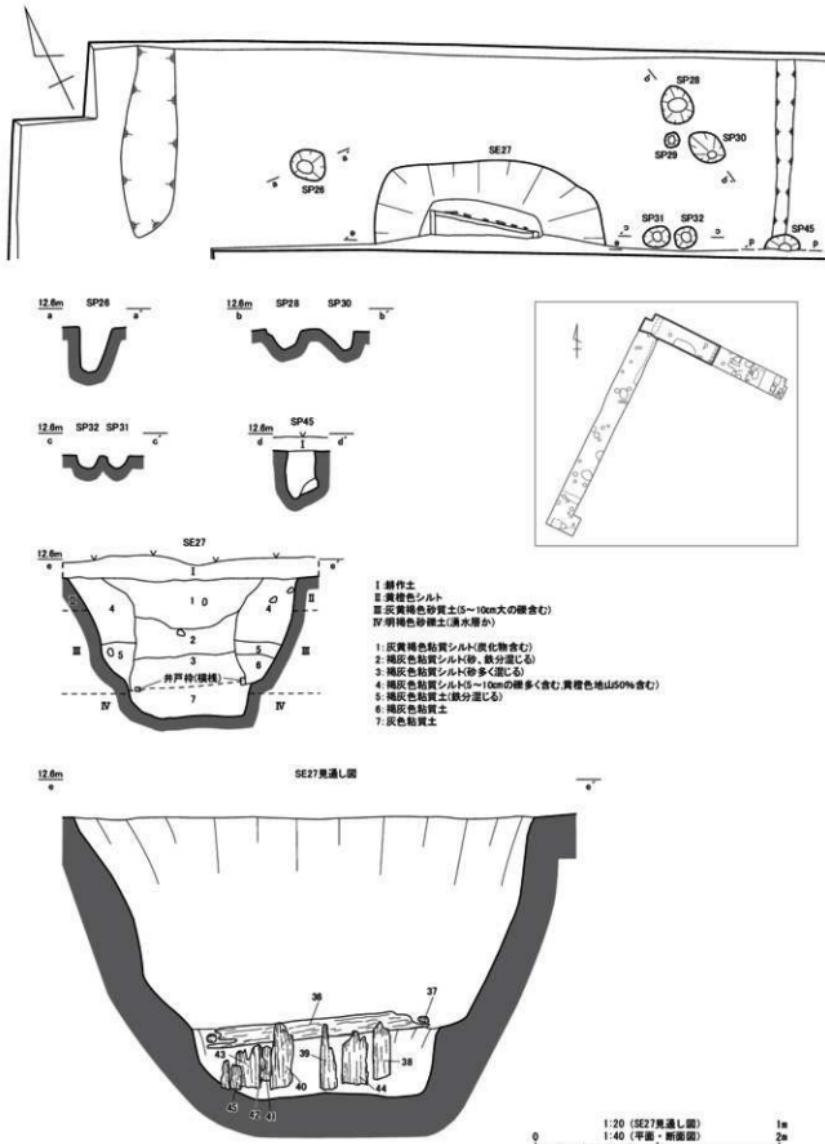
- SP31 (第 10 図) G 区で検出した。楕円形で、長軸 0.22m、短軸 0.17m、深さ 0.10m である。出土遺物はない。
- SP32 (第 10 図) G 区で検出した。円形で、径 0.19m、深さ 0.11m である。出土遺物はない。
- SP33 (第 11 図) G 区で検出した。径 0.28m、深さ 0.59m である。土師器が出土した。古代の遺構とみられる。
- SP34 (第 11 図) G 区で検出した。不整椭円形で、長軸 0.27m、短軸 0.21m、深さ 0.51m である。土師器、須恵器が出土した。9 世紀後半頃とみられる。
- SP36 (第 11 図) G 区で検出した。楕円形で、長軸 0.30m、短軸 0.26m、深さ 0.31m である。土師器が出土した。古代の遺構とみられる。
- SP37 (第 11 図) G 区で検出した。楕円形で、長軸 0.32m 以上、短軸 0.31m、深さ 0.17m である。土師器、鉄滓が出土した。古代の遺構とみられる。
- SP39 (第 11 図) H 区で検出した。SK38 の断面観察において、重複して掘り込まれている状況を確認した。長さ 0.24m、深さ 0.07m である。出土遺物はない。
- SP42 (第 8 図) C 区で検出した。径 0.44m、深さ 0.30m である。土師器、須恵器が出土した。古代の遺構とみられる。
- SP43 (第 8 図) A 区で検出した。不整円形で、径 0.30m、深さ 0.18m である。須恵器が出土した。9 世紀初頭～前半とみられる。
- SP45 (第 10 図) G 区で検出した。円形で、長軸 0.29m、深さ 0.39m である。出土遺物はない。
- SP49 (第 8 図) A 区で検出した。楕円形で、長軸 0.24m、短軸 0.20m、深さ 0.23m である。出土遺物はない。
- SP50 (第 8 図) A 区で検出した。楕円形で、長軸 0.28m、短軸 0.24m、深さ 0.22m である。出土遺物はない。
- SP52 (第 8 図) A 区で検出した。円形で、径 0.25m、深さ 0.33m である。出土遺物はない。
- SP53 (第 8 図) B 区で検出した。楕円形で、長軸 0.32m、短軸 0.30m、深さ 0.41m である。土師器、須恵器が出土した。古代の遺構とみられる。
- SP54 (第 8 図) B 区で検出した。楕円形で、長軸 0.22m、短軸 0.20m、深さ 0.19m である。土師器、中世土師器皿が出土した。16 世紀後半とみられる。
- SP56 (第 8 図) A 区で検出した。円形で、径 0.17×0.15m、深さ 0.24m である。中世土師器皿が出土した。13 世紀代か。
- SP57 (第 11 図) H 区で検出した。西側は搅乱を受ける。楕円形で、長軸 0.30m、短軸 0.14m、深さ 0.34m である。土師器が出土した。古代の遺構とみられる。
- SP60 (第 11 図) H 区で検出した。楕円形で、長軸 0.17m、短軸 0.14m、深さ 0.20m である。出土遺物はない。
- SP61 (第 11 図) H 区で検出した。楕円形で、長軸 0.12m、短軸 0.10m、深さ 0.14m である。出土遺物はない。
- SP62 (第 11 図) H 区で検出した。楕円形で、長軸 0.45m、短軸 0.29m、深さ 0.25m である。土師器、須恵器が出土した。
- SP63 (第 11 図) H 区で検出した。一部の検出で、深さ 0.38m 以上である。須恵器が出土した。
- SP64 (第 11 図) H 区で検出した。一部の検出で、深さ 0.16m 以上である。須恵器が出土した。
- SP65 (第 11 図) H 区で検出した。楕円形で、長軸 0.28m、短軸 0.19m、深さ 0.39m である。須恵器



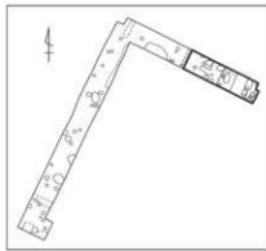
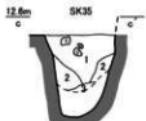
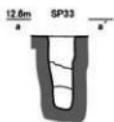
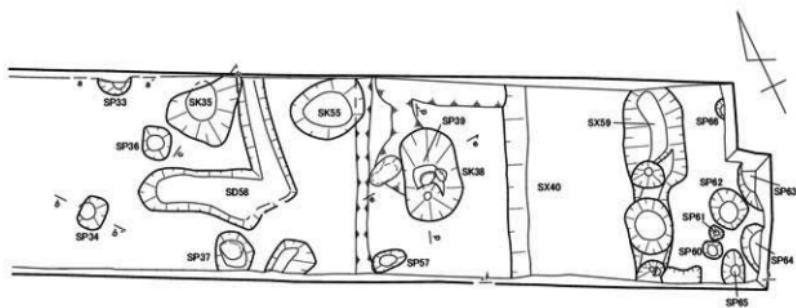
第8図 検出遺構(1)



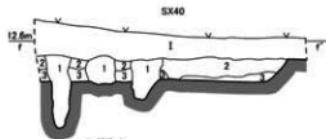
第9図 掘出遺構(2)



第10図 検出遺構 (3)



- 1: 暗灰色粘質シルト(黄褐色地山30%含む)
2: 暗灰色粘質シルト(黄褐色地山50%含む)
3: にぶい黄褐色砂質シルト



- 1: 灰黄褐色粘質シルト(SP39)
2: 暗灰色粘質シルト(SK38)
3: 暗灰色粘質シルト(黄褐色地山50%含む)SK38
4: 暗灰色粘質土(炭化物含む)SK38

- I: 耕作土
1: 暗灰色粘質シルト(寛永通宝・近世磁器含む、SX40より新しい遺構)
2: 灰黄褐色粘質シルト
3: 暗灰色粘質シルト(黄褐色地山30%含む)

0 1:40 2m

第 11 図 掘出遺構 (4)

器が出土した。重複する SX40 より新しいため、13 世紀中葉～後半以降である。

SP66 (第 11 図) H 区で検出した。径 0.16m、深さ 0.17m である。出土遺物はない。

7 不明遺構

SX40 (第 11 図) H 区で検出した。南北方向の溝状になると推定される。検出長は東西 1.81m、南北 1.59m、深さ 0.20m で、底面はほぼ平坦である。断面観察から重複する SX59・SP65 より古い。検出面で礫が多数みられた（写真図版 6）。遺物は土師器、須恵器、珠洲、伊万里、鉄滓が出土したが、このうち伊万里については、重複する SX59 で出土しており、本来は SX59 に伴っていたとみる。したがって、遺構の時期は、珠洲が示す 13 世紀中葉～後半と判断する。

SX59 (第 11 図) H 区で検出した。重複する SX40 より新しい。南北方向に延びる。検出長 1.57m、幅 0.22～0.51m、深さ 0.24m である。主軸方向は N-25° E である。中央から南部にかけてピット状の掘り込みが 3ヶ所あり、底面は凹凸がある。土師器、伊万里、陶器、鉄滓、鉄製品、銅錢（寛永通宝）が出土した。17 世紀後半とみられる。
(宮田)

第 4 節 遺 物

1 概 要

出土遺物はコンテナケース 6 箱分で、うち木製品（井戸枠）が 1 箱ある。土器・陶磁器はほとんどが破片で、全体を復元できるものはない。

遺物は、大きく遺構出土遺物と遺物包含層である地山出土遺物に分けられる。遺構出土遺物は、古代、中世、近世の遺物が混在する。多いのは古代の遺物である。近世の遺物は、若干の陶磁器と銅錢があるのである。包含層（地山）の出土遺物はほとんどが 8 世紀後半から 9 世紀初頭の土師器・須恵器である。遺構出土遺物に比べて、量が多く、残存状態も良いものが多い。

なお、遺物の時期比定にあたっては主に次の文献を参考にした。古代土器：田嶋 1988・望月 2006、中世土師器：森 2005・堀内 2017、珠洲：吉岡 1994、近世越中瀬戸：宮田 1997。

以下、遺構と包含層（地山）出土遺物にわけ、搅乱と試掘調査の遺物をくわえて記述する。

2 遺構出土遺物（第 12～14 図）

SD58 1 は須恵器の壺蓋で、天井部は回転ヘラケズリを行う。2 は須恵器の壺身である。

SK09 3 は須恵器の壺蓋で、端部は丸い。4・5 はそれぞれ須恵器の壺 A 身・壺 B 身で、4 は底部を回転ヘラ切りする。5 は外面に降灰による自然釉がかかる。6 は須恵器瓶で、外面は薄く降灰している。7 は土師器甕の体部片で、器面は摩滅している。8 は管状土錐である。9 の銅錢は文字が潰れているが、熙寧元寶（北宋 1068 年初鑄）と思われる。

SK11 10 は須恵器の壺 A 身で、底部は回転ヘラ切りである。11 の土師器甕は口縁を内側へ折り返し、端部を丸く仕上げる。

SK19 12 は須恵器壺蓋で、口縁部が屈曲し、端部は丸く仕上げる。13 はシルト岩の砥石で、表裏面と側面の 4 面に擦痕がある。破断後に被熱したか、一部黒化している部分がある。

SK20 14 は須恵器の壺 A 身で回転ヘラ切りである。15 は土師器甕で、胎土に 1～2mm の砂礫を含む。

SK21 16 は須恵器の壺 A 身で、焼成や不良である。17 は土師器の塊か。口縁端部を面取りして先端が三角形状になる。18 は越中瀬戸の丸皿で、見込みは、中心からややずれた位置に十六弁菊の印

花があり、円形の重ね焼き痕が認められる。口縁から体部外面は厚く灰釉がかかる。

SK35 19~21 は須恵器である。19 は坏蓋で端部の返しはごく小さい。20 は坏 A 身、21 は甕の体部片である。

SK38 22~24 は須恵器である。22 の坏身は、口縁外面が薄く降灰する。23 の甕は口縁内端が小さく挽き出される。生焼けである。24 の甕は、還元焰焼成で硬質の土師質を呈する。

SK55 25 は須恵器の坏蓋で、口縁端部は折り返して丸く仕上げる。

SE27 古代と中世の遺物がある。26 は須恵器の坏蓋である。口縁端部は内傾して垂下させる。27 ~29 は須恵器坏身である。28 は底部回転ヘラ切り後、不定方向のナデを行う。29 は外に踏ん張る形態の高台である。30~32 は土師器甕である。30 は口縁端部を上方に小さく摘み上げる。33・34 は珠洲の擂鉢である。別個体として図示したが、卸目や器面の調子がよく似ており、同一個体の可能性が高い。卸目はいずれも一単位 1.4cm、7 目の細密な原体による。内面のナデ調整痕が凹凸となって明瞭に残る。吉岡編年(吉岡 1994) II 期である。35 は青磁の劃花文皿である。見込みにジグザグ状の備目文様を入れる。12 世紀後半~13 世紀前半である。36~45 は井戸枠材である。いずれも表面が腐朽しており、刃物等の加工痕はみえない。36・37 は横桟である。全長 90cm 程の角材を用いる。36 は両端に凹形のホゾ穴、37 は両端に凸形のホゾを作出した痕跡が認められる。36 は、ホゾ穴とは別に端部の一方に長さ 15cm 程の抉り込みがあるが用途不明である。37 の横桟と材の厚さも異なり、古材の転用品の可能性もある。38~45 は紙板である。上部は残存せず、全長がわかるものはない。幅は約 10cm と 5.5~7cm ほどのものがある。厚さは 0.6~1.4cm である。下端を斜めにカットするものが多い。

SP03 46 は須恵器の坏 A 身で、底部は回転ヘラ切りである。

SP34 47 は須恵器の甕、48・49 は赤彩した土師器塊である。

SP37 50 は鉄滓である。

SP43 51 は須恵器の甕である。口縁端部を水平に挽き出す。

SP54 52 は中世土師器皿である。口縁部が外反し、端部を小さく摘み上げる。

SP56 53 は中世土師器皿である。内湾する口縁で、内外面は油煙が付着する。

SX40 54・55 は須恵器の坏蓋である。54 は端部を小さく垂下させ、外面は沈線がめぐる。55 は端部を内側に折り曲げてやや丸みがある。56~60 は須恵器坏身で、58~60 は底部回転ヘラ切りである。60 の坏 B は高台が外方に広がる。61 の須恵器は底部が丸みをもち、壺か。62 は土師器の鍋か甕である。口縁部を上方に摘み上げ、外面は面取りする。63・64 は土師器甕で、摩滅している。65 は須恵器の甕である。66 は白色胎土の中世土師器皿である。67 は珠洲の擂鉢で、方頭の外傾口縁である。吉岡編年 III~IV 1 期である。68 は珠洲の甕である。69 は伊万里碗の高台、70 は伊万里の瓶類か。

SX59 71 は土師器甕か、72 は銅錢(寛永通宝)、73 は鉄滓である。

SP62 74 は須恵器の瓶である。肩部に稜があり、沈線がめぐる。75 は土師器の小型甕である。

3 包含層(地山)出土遺物(第 15・16 図)

地山(II 層)に包含されるのは、すべて古代の遺物である。第 6 図の区割にしたがうと、A 区から H 区、すなわち南西から北東に向かって出土量が増える傾向にある。重量で比較すると、A 区 250g、B 区 650g、C 区 640g、D 区 590g、E 区 570g、F 区 790g、G 区 2270g、H 区 850g である。H 区が少ないのは、区の半分以上を SX40 が占めているためである。こうした出土傾向は、北東に向かって地山(II 層)がより厚く堆積していることと関係している。遺物の時期は 8 世紀後半~9 世紀初頭が中心である。なお、78・127・139 は表土の機械掘削中に出土したものであるが、本来的には地山に包含されていた

可能性があるため本項で記述する。

A 区 76・77は須恵器の坏身である。77は扁平な高台がつく。78は須恵器の瓶で、外面が降灰している。79は土師器の甕であるが、全体的に摩滅している。

B 区 80・81は須恵器の坏蓋である。天井部から口縁部までなだらかに移行し、端部は丸い。82は還元焰焼成の須恵器坏身である。83は須恵器の瓶である。84・85は土師器の小型甕である。いずれも口縁端部を上に小さく摘み上げる。86は土師器の甕と思われる。器壁の底面は水平に接地する。外面は薄く煤が付着する。

C 区 87～89は須恵器の坏蓋である。87は端部が丸い。88は返しがごく小さく、端部を面取りする。他と比べ器高は高い。89は口縁部が屈曲し、端部は内側にかえす。90は土師器の甕である。口縁部が屈曲し、端部をわずかに上に摘み上げる。91は土師器の鍋で、端部は肥厚し、外面を面取りする。

D 区 92は須恵器の坏A身、93は坏B身である。92は底部回転ヘラ切りである。94は土師器の鍋、95～99は土師器の甕である。95は端部を上方に摘み上げる。96も端部を摘み上げ、外面に明瞭な面取りをする。97は「く」の字状に外反する口縁である。

E 区 100は須恵器の坏B身で、高台が外方に開く。101～103は土師器の甕で、いずれも口縁端部を上方に小さく摘み上げ、外面を面取りする。

F 区 104・105は須恵器の坏蓋である。104は口縁端部を垂下させ、外面は降灰している。106は須恵器の坏B身である。高台は外端接地である。107～111は土師器の甕である。端部を小さく摘み上げて外面を面取りする107・108と、口縁が緩やかに外反して端部が丸い109・110がある。112は管状土錘、113は鉄滓である。

G 区 114～117は須恵器の坏蓋である。114・115は扁平な宝珠形つまみがつき、口縁端部を小さく垂下させ外面は面ができる。116・117の口縁部も同様のタイプである。118は須恵器の坏身、119～122坏A身、123は坏B身である。口縁部は直線的に立ち上がる。底部が残るものはいずれも回転ヘラ切りである。123は扁平な高台がつく。124は須恵器の瓶で、外面が薄く降灰する。125は須恵器の壺類か瓶類の底部である。底部と体部の境は明瞭な稜がある。126は須恵器の横瓶である。外面は縦方向のカキメと平行タタキがみられる。外面の一部が降灰する。127は土師器の有台壺である。内外面とも赤彩している。128は土師器の鍋か。129～132は土師器の甕である。129は「く」の字状の口縁で端部を丸くおさめる。底部片の130～132は外面下部にケズリを行う。132は底部回転糸切りである。133は管状土錘である。

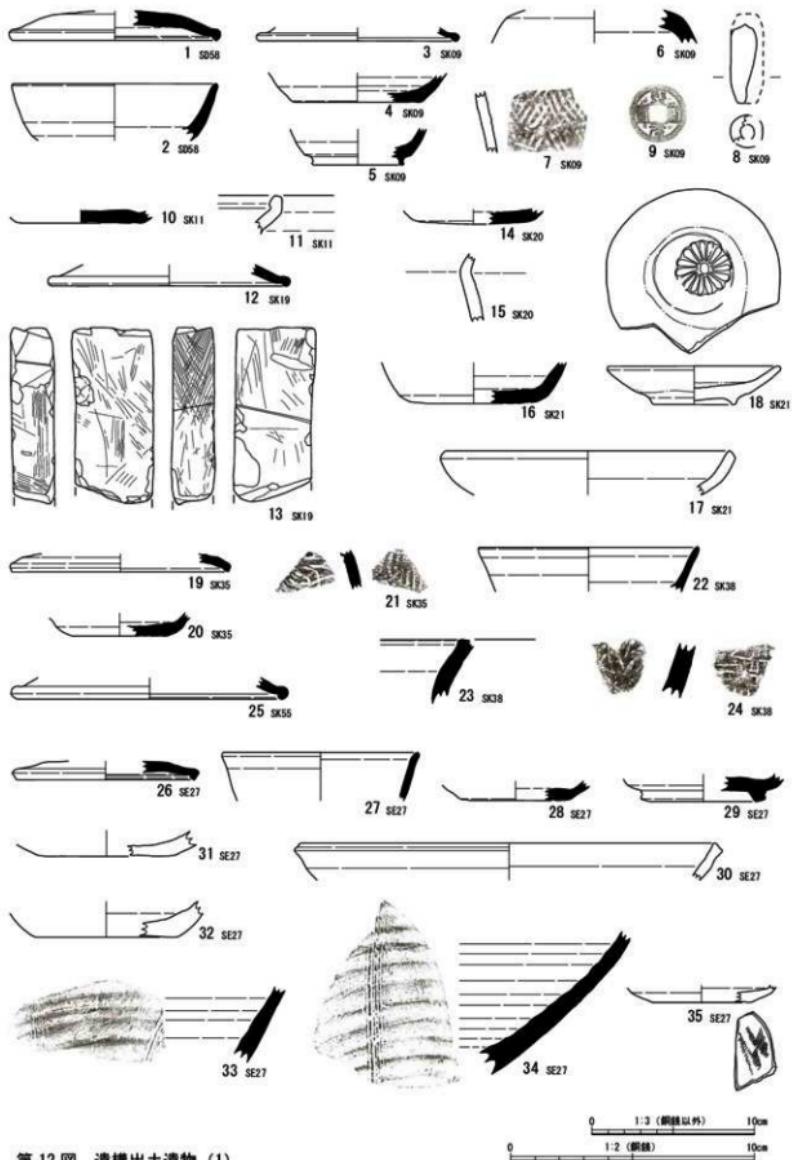
H 区 134・135は須恵器の坏蓋である。いずれも端部を内側に小さく折り返す。136～140は須恵器の坏身である。137・138・140は底部回転ヘラ切りである。有台坏の139・140はいずれも扁平な高台がつく。141は須恵器の甕で、外面は平行タタキ後、カキメ調整である。142・143は土師器の甕である。いずれも外傾した口縁の端部を面取りし、内端・外端が拡張する。

4 撤乱 (SD04) 出土遺物 (第16図)

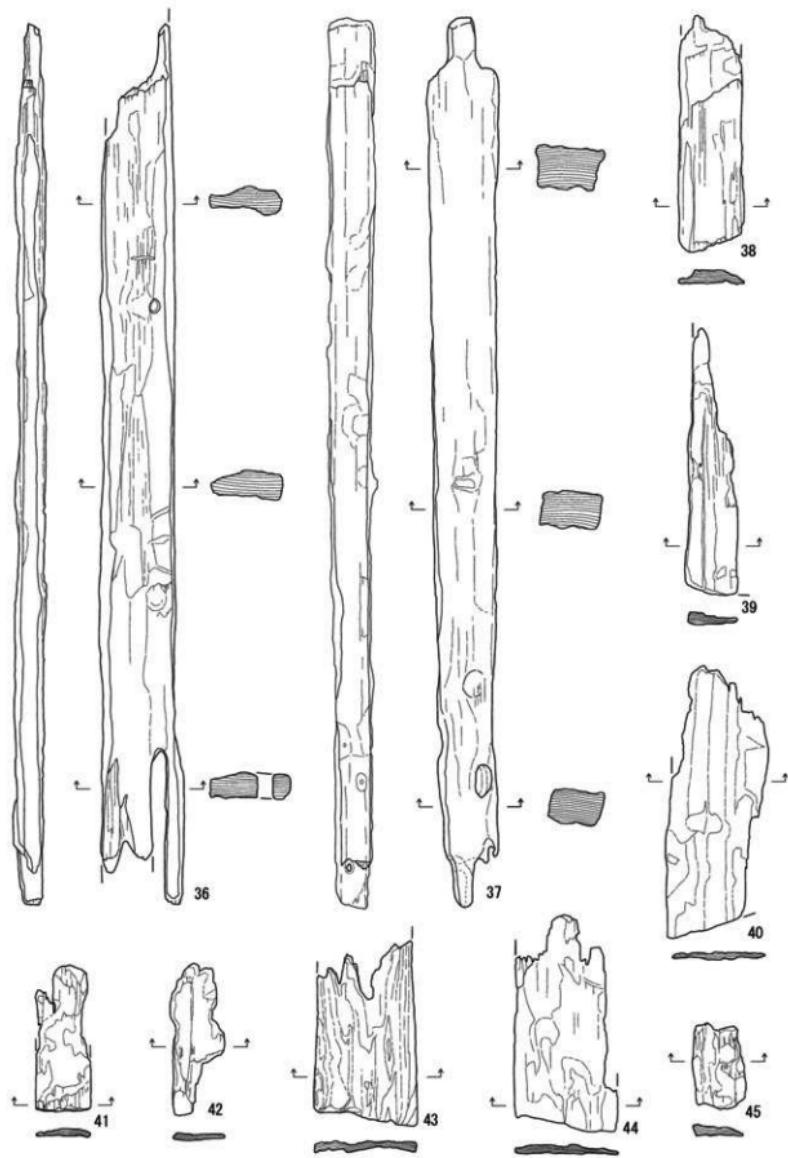
144は須恵器の坏蓋で端部は丸い。145は坏B身である。146は土師器の壺である。147は珠洲の甕で、内面の押圧痕が明瞭に残る。

5 試掘調査出土遺物 (第16図)

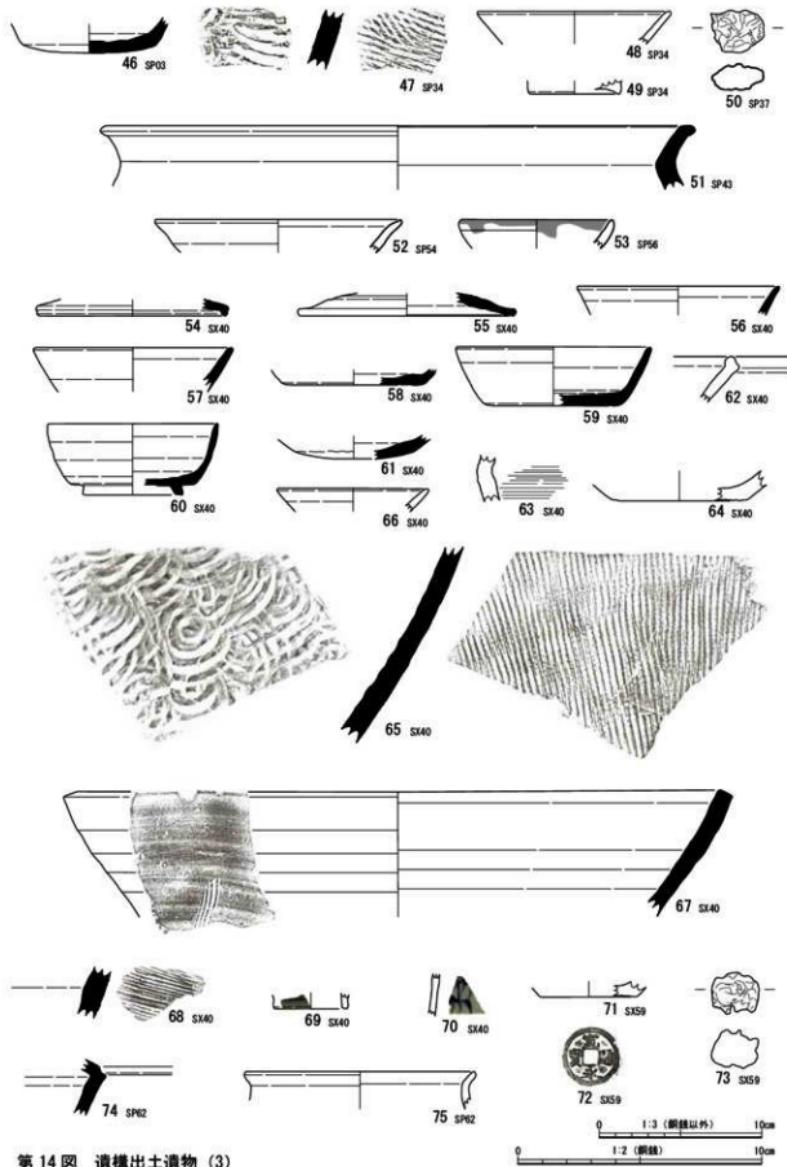
148・149は須恵器の甕である。148は出土遺物中、甕の中では最も残りが良い。口縁端部は水平方向に屈曲し、頸部外面が降灰している。149は甕の体部片である。器壁は薄い。(野垣)



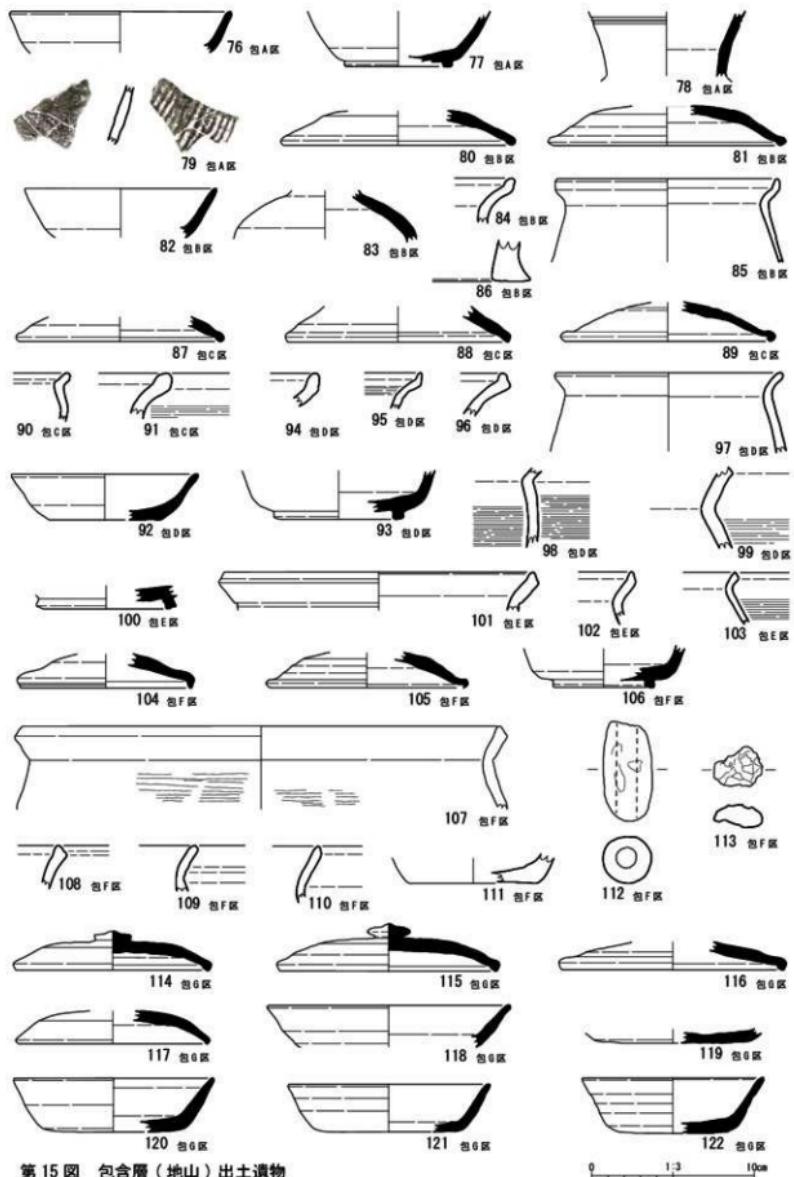
第12図 遺構出土遺物(1)



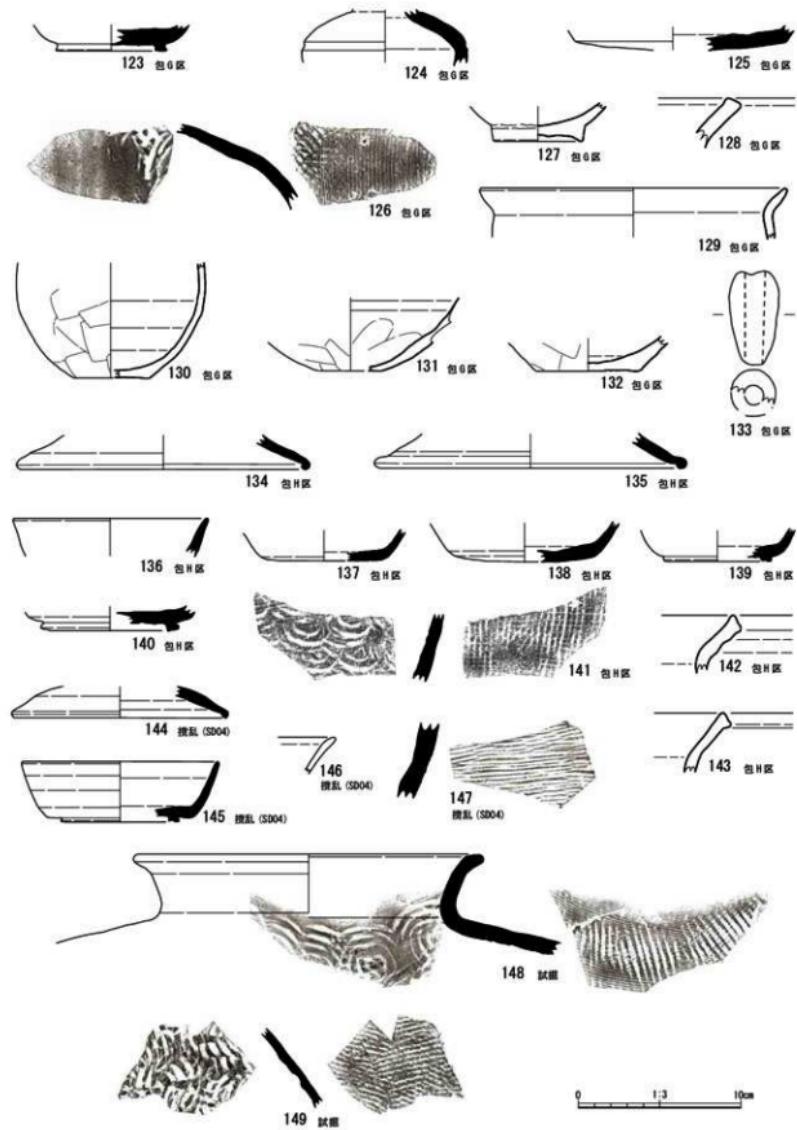
第13図 造構出土遺物(2) SE27 井戸枠



第14図 遺構出土遺物(3)



第15図 包含層(地山)出土遺物



第16図 包含層（地山）・搅乱・試掘調査出土遺物

第1表 遺物観察表

図	番号	種別	器種	出土遺構	寸法(cm)			釉	胎土	焼成	色調	調整		備考	
					口径	器高	底径(幅)					外面	内面		
	1	須恵器	环蓋	SD58	(12.4)			自然釉	密	良	Nt/ 灰	ロクロナダ 回転ヘラケズリ	ロクロナダ		
	2	須恵器	环身	SD58	(12.4)				密	良	Nt/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ		
	3	須恵器	环蓋	SK09	(12.0)				密	良	7.SV6/1 灰	ロクロナダ	ロクロナダ		
	4	須恵器	环A身	SK09		(7.6)			密	良	Nt/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ		
	5	須恵器	环身	SK09		(5.4)		自然釉	密	良	SV5/1 灰	ロクロナダ	ロクロナダ		
	6	須恵器	瓶	SK09				自然釉	密	良	SV5/1 灰	ロクロナダ	ロクロナダ		
	7	土師器	甕	SK09					密	良	10SV7/4 にらむ黄緑	タタキ		摩滅	
	8	土製品	土拂	SK09	残存 4.9	残存 1.6	0.6		密	良	2.5V7/3 浅黄	ナゲ		管状	
	9	金属製品	銅錢	SK09	2.4	2.4	0.1							聖寧元寶(北宋1068年刊鑄)	
	10	須恵器	环A身	SK11		(7.4)		密	良	7.SV6/1 灰	ロクロナダ ナダ	ロクロナダ ナダ		底部回転ヘラ切	
	11	土師器	甕	SK11					密	良	10SV6/3 にらむ黄緑	ロクロナダ	ロクロナダ		
	12	須恵器	环蓋	SK19	(14.4)				密	良	Nt/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ		
	13	石製品	砥石	SK19	残存 10.9	5.1	2.7			良	7.SV6/1 灰	ロクロナダ	ロクロナダ	シルト岩、4面に擦痕。破断後被	
	14	須恵器	环A身	SK20		(1.9)		密	良	10SV6/2 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ		底部回転ヘラ切	
	15	土師器	甕	SK20					密	良	5V6/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	径1~2mmの砂礫含む。單	
	16	須恵器	环A身	SK21		(4.4)			密	やや 不良	10VH7/4 にらむ黄緑	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転ヘラ切	
	17	土師器	塙か	SK21	(17.4)				密	良	ロクロナダ	ロクロナダ			
第12回	18	越中瓶戸	丸皿	SK21	10.5	2.35	4.8	灰釉 灰釉	密	良	SV8/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	剛出高台。見込みに印花文と蓋ね焼き板	
	19	須恵器	环蓋	SK35	(13.4)				密	良	Nt/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ		
	20	須恵器	环身	SK35		(5.8)			密	良	SV7/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転ヘラ切	
	21	須恵器	甕	SK35					密	良	SV6/1 灰	タタキ→カキメ	同心円當て具		
	22	須恵器	环身	SK38	(13.4)			自然釉	密	良	2.5V7/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ		
	23	須恵器	甕	SK38					密	不良	SV8/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	生焼け。摩滅	
	24	須恵器	甕	SK38					密	不良	7.SV8/4 にらむ黄緑	タタキ	同心円當て具	聖元焰燒成	
	25	須恵器	环蓋	SK55	(16.2)				密	良	Nt/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ		
	26	須恵器	环蓋	SE27	(16.8)				密	良	Nt/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ		
	27	須恵器	环身	SE27	(11.9)				密	良	Nt/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ		
	28	須恵器	环A身	SE27		(5.6)			密	良	7.SV7/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転ヘラ切り→ナダ	
	29	須恵器	环B身	SE27		(6.4)			密	良	Nt/ 灰	ロクロナダ ナダ	ロクロナダ ナダ		
	30	土師器	甕	SE27	(25.5)				密	良	7.SV9/4 にらむ黄緑	ロクロナダ	ロクロナダ		
	31	土師器	甕	SE27		(5.6)			密	良	7.SV9/4 淡黄緑			摩滅	
	32	土師器	甕	SE27		(8.4)			自然釉	密	良	10SV6/3 淡黄緑	ロクロナダ		
	33	床匣	擂钵	SE27							Nt/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ	印目7日/1.4cm	
	34	床匣	擂钵	SE27							Nt/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ	印目7日/1.4cm	
	35	青磁	皿	SE27		(6.0)		青磁釉	密	良	Nt/ 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	見込みに網目の刻花文。因安系名	
第13回	36	木製品	舟戸檜(横桟)	SE27	残存 99.4	3.2	8.5								
	37	木製品	舟戸檜(横桟)	SE27	残存 91.3	4.9	7.5								

図	番号	種別	器種	出土遺構	寸法(cm)			軸	胎土	焼成	調査		備考	
					口径(長径) (幅)	高さ (幅)	底径(厚さ)				胎土	外面	内面	
第13回	38	木製品	舟戸枠 (縦板)	SE27	残存 24.2	6.8	1.4							
	39	木製品	舟戸枠 (縦板)	SE27	残存 27.3	5.4	1.3							
	40	木製品	舟戸枠 (縦板)	SE27	残存 27.9	10.6	0.8							
	41	木製品	舟戸枠 (縦板)	SE27	残存 15.0	5.7	0.7							
	42	木製品	舟戸枠 (縦板)	SE27	残存 15.6	5.6	0.6							
	43	木製品	舟戸枠 (縦板)	SE27	残存 18.9	10.7	1.0							
	44	木製品	舟戸枠 (縦板)	SE27	残存 22.2	10.6	1.0							
	45	木製品	舟戸枠 (縦板)	SE27	残存 8.8	5.5	1.2							ズギ
第14回	46	須恵器	环人身	SP03			(3.0)		密	良	2.5V6/1 黄灰 N&/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転へラ切
	47	須恵器	甕	SP34					密	良	タタキ	同心円当て具		
	48	土師器	壺	SP34	(11.8)				密	良	10Y8R/3 淡黄褐 ナダ	ナダ	ナダ	内外面赤彩
	49	土師器	壺	SP34			(5.4)		密	良	10Y8R/3 淡黄褐 ナダ	ナダ	ナダ	外面赤彩
	50	金属製品	銅津	SP37	3.3	2.6	1.6							15g
	51	須恵器	甕	SP43	(35.8)				密	やや 良	5Y8R/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	
	52	中世土師器	甕	SP54	(15.0)				密	良	10Y8R/4 にじみ黄褐 ヨコナダ	ヨコナダ		
	53	中世土師器	甕	SP56	(9.2)				密	良	7.5V8R/2 灰白 ナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	内外面赤彩
	54	須恵器	环蓋	SX40	(11.0)			自然釉	密	良	5Y7/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	
	55	須恵器	环蓋	SX40	(13.0)				密	良	N&/ 灰 ロクロナダ 開削へラケズ	ロクロナダ		
	56	須恵器	环身	SX40	(12.4)				密	良	5Y7/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	
	57	須恵器	环身	SX40	(12.0)				密	良	N&/ 灰 ロクロナダ	ロクロナダ		
	58	須恵器	环人身	SX40			(7.4)		密	良	N&/ 灰 ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転へラ切
	59	須恵器	环人身	SX40	(11.8)	3.6	(7.4)		密	やや 良	2.5V7/2 灰黄 ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転へラ切→ナダ
	60	須恵器	环人身	SX40	(10.4)	4.35	(6.0)		密	良	NT/ 灰白 ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転へラ切
	61	須恵器	壺か	SX40			(2.6)		密	良	N&/ 灰 ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	
	62	土師器	鍋山型	SP40					密	良	7.5V8R/3 淡黄褐 ロクロナダ	ロクロナダ		
	63	土師器	甕	SP40					密	良	7.5V8R/3 にじみ カキメ	ロクロナダ	ロクロナダ	摩滅
	64	土師器	甕	SP40			(7.4)		密	良	7.5V8R/4 淡黄褐 ケズリ	ロクロナダ	ロクロナダ	摩滅
	65	須恵器	甕	SP40					やや 良	やや 良	7.5V8/1 灰白 タタキ	ロクロナダ	ロクロナダ	同心円当て具
	66	中世土師器	甕	SP40	(9.2)				やや 良	やや 不良	N&/ 灰白 ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	
	67	珠網	縄鉢	SX40	(39.4)				密	良	N&/ 灰 ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	即日6日/1.3cm
	68	珠網	甕	SX40					やや 良	やや 良	N&/ 灰 タタキ	当て具		
	69	伊万里	瓶	SX40	(4.4)			透明釉	密	良	N&/ 灰白 ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	外面黒線
	70	伊万里	瓶瓶か	SX40				透明釉	密	良	N&/ 灰白 ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	外面竹文が後文
	71	土師器	壺か	SX59			(5.8)		密	良	10Y8R/3 にじみ黄褐			
	72	金属製品	銅津	SX59	2.4	2.4	0.1							寛永通宝(古匱本、1636~59年)
	73	金属製品	銅津	SX59	2.9	2.6	2.4		密	良	N&/ 灰 ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	15g
	74	須恵器	甕	SP62					密	良	10Y8R/2 灰白 ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	
	75	土師器	甕	SP62	(14.0)				密	良				

図	番号	種別	器種	出土遺物	寸法(cm)			軸	胎土	焼成	調査		備考	
					口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚さ)				胎土	色調	外面	
	76	須恵器	环身	包含縁(地山)AK	(13.4)				密	やや良	5V8/1灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
	77	須恵器	环身	包含縁(地山)AK		(6.4)			密	良	Ng/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
	78	須恵器	瓶	表文剥削AK					自然釉	密	良	2,5V7/1灰白	ロクロナダ	ロクロナダ
	79	土師器	甕	包含縁(地山)AK					密	やや良	10V8B/3浅黄根	タタキ	同心円当て具	摩滅
	80	須恵器	环蓋	包含縁(地山)BK	(14.0)				密	良	Ng/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	内外面焼
	81	須恵器	环蓋	包含縁(地山)BK		(13.9)			密	良	Ng/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
	82	須恵器	环身	包含縁(地山)BK	(11.7)				密	不良	10V8T/2にらみ黄根	ロクロナダ	ロクロナダ	匣元施作成
	83	須恵器	瓶	包含縁(地山)BK					密	良	NT/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
	84	土師器	甕	包含縁(地山)BK					密	やや良	10V8B/1灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	
	85	土師器	甕	包含縁(地山)BK	(13.5)				密	良	7,5V8B/3にらみ黄根	ロクロナダ	ロクロナダ	内面焼
	86	土師器	瓶小	包含縁(地山)BK					密	良	7,5V8B/4浅黄根	ロクロナダ	ナダ	外側焼
	87	須恵器	环蓋	包含縁(地山)CK	(12.3)				密	良	NT/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
	88	須恵器	环蓋	包含縁(地山)CK	(13.5)				密	良	Ng/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
	89	須恵器	环蓋	包含縁(地山)CK	(12.6)				密	良	NT/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
	90	土師器	甕	包含縁(地山)CK					密	良	7,5V8B/2灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	
	91	土師器	鍋	包含縁(地山)CK					密	良	10V8B/3浅黄根	ロクロナダ	カキメ	
	92	須恵器	环人身	包含縁(地山)DK	(11.4)	2.8	(6.8)		密	良	NT/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転へり切
	93	須恵器	环身	包含縁(地山)DK			(7.0)		密	良	5V8/1灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	摩滅
第15団	94	土師器	鍋	包含縁(地山)DK					密	良	10V8B/2灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	
	95	土師器	甕	包含縁(地山)DK					密	良	5V8T/6根	ロクロナダ	ロクロナダ	
	96	土師器	甕	包含縁(地山)DK					密	良	7,5V8B/3浅黄根	ロクロナダ	カキメ	
	97	土師器	甕	包含縁(地山)DK	(13.7)				密	良	7,5V8T/4にらみ黄根	ロクロナダ	ロクロナダ	
	98	土師器	甕	包含縁(地山)DK					密	良	7,5V8B/4浅黄根	ロクロナダ→カ	ロクロナダ→カ	外側焼
	99	土師器	甕	包含縁(地山)DK					密	良	7,5V8T/6根	ロクロナダ→カ	ロクロナダ	
	100	須恵器	环身	包含縁(地山)DK					密	やや良	2,5V8/1灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転へり切→ナダ
	101	土師器	甕	包含縁(地山)DK		(19.0)			密	良	10V8T/3にらみ黄根	ロクロナダ	ロクロナダ	内面焼
	102	土師器	甕	包含縁(地山)DK					密	良	7,5V8B/4浅黄根	ロクロナダ	ロクロナダ	
	103	土師器	甕	包含縁(地山)DK					密	良	10V8B/4浅黄根	ロクロナダ	ロクロナダ	
	104	須恵器	环蓋	包含縁(地山)FK	(10.4)				自然釉	密	NT/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
	105	須恵器	环蓋	包含縁(地山)FK		(11.8)			密	良	Ng/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
	106	須恵器	环身	包含縁(地山)FK					密	良	NT/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転へり切→ナダ
	107	土師器	甕	包含縁(地山)FK	(29.3)				密	良	10V8T/4にらみ黄根	ロクロナダ	ロクロナダ	
	108	土師器	甕	包含縁(地山)FK					密	やや良	10V8B/2灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	
	109	土師器	甕	包含縁(地山)FK					密	良	10V8B/2灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	
	110	土師器	甕	包含縁(地山)FK					密	良	7,5V8B/3浅黄根	ロクロナダ	ロクロナダ	
	111	土師器	甕	包含縁(地山)FK					密	良	7,5V8B/4浅黄根	ケズリ?	ロクロナダ	摩滅
	112	土製品	土鐘	包含縁(地山)FK	6.2	3.0	1.0		密	良	10V8B/1灰白	ナダ		管状
	113	金属製品	鉄滓	包含縁(地山)FK	3.0	2.4	1.4							13g

図	番号	種別	器種	出土遺物	寸法(cm)		軸	胎土	焼成	色調	調形		備考
					口径(長さ)	器高(幅)					外側	内面	
第15回	114	瓶	环瓶	包含層(地山) GK	11.8	2.4		密	良	Ng/ 灰	ロクロナダ 回転ヘラケズリ	ロクロナダ	
	115	瓶	环瓶	包含層(地山) GK	13.2	2.9	自然軸	密	良	Ng/ 灰	ロクロナダ 回転ヘラケズリ	ロクロナダ	
	116	瓶	环瓶	包含層(地山) GK	(13.6)			密	やや 不良	5V7/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	
	117	瓶	环瓶	包含層(地山) GK	(11.6)			密	良	N4/ 灰	ロクロナダ 回転ヘラケズリ	ロクロナダ	
	118	瓶	环身	包含層(地山) GK	(14.8)			密	良	N5/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
	119	瓶	环身	包含層(地山) GK		(6.2)		密	良	2.5V8/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転ヘラ切
	120	瓶	环身	包含層(地山) GK	(12.2)	3.3	(4.2)	密	やや 良	5V8/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転ヘラ切
	121	瓶	环身	包含層(地山) GK	(12.4)	2.9	(6.8)	密	良	10V7/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転ヘラ切
	122	瓶	环身	包含層(地山) GK	(11.1)	3.4	(4.7)	密	やや 不良	2.5V8/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転ヘラ切
	123	瓶	环身	包含層(地山) GK		(6.7)		密	良	N4/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転ヘラ切→ナダ
第16回	124	瓶	瓶	包含層(地山) GK			自然軸	密	良	5V7/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	
	125	瓶	瓶	包含層(地山) GK				密	良	Ng/ ナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	
	126	瓶	横模	包含層(地山) GK			自然軸	密	良	5V7/1 灰白	カタメ	ロクロナダ	同心円当て具
	127	土師器	壺	表土剥離 GK		(5.3)		密	良	10V8/3 淡黄褐	ロクロナダ	ロクロナダ	外面部彩
	128	土師器	罐	包含層(地山) GK				密	やや 良	2.5V8/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	
	129	土師器	甕	包含層(地山) GK	(18.8)			密	良	7.5V8/4 にぶん	ロクロナダ	ロクロナダ	
	130	土師器	甕	包含層(地山) GK		(4.6)		密	良	7.5V8/3 淡黄褐	ケズリ	ロクロナダ	
	131	土師器	甕	包含層(地山) GK		(4.0)		密	良	7.5V8/4 淡黄褐	ケズリ	ロクロナダ	外面剥落、被熱か
	132	土師器	甕	包含層(地山) GK		(6.3)		密	良	5V8/2 緑	ケズリ	ロクロナダ	底部回転糸切り
	133	土製品	土錐	包含層(地山) GK	5.8	3.1	1.0	密	良	10V8/2 灰白	ナダ		管状
	134	瓶	环瓶	包含層(地山) HK	(17.5)			密	良	Ng/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
	135	瓶	环瓶	包含層(地山) HK	(18.4)			密	良	N7/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
	136	瓶	环身	包含層(地山) HK	(11.8)			密	良	N5/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
	137	瓶	环身	包含層(地山) HK		(5.6)		密	良	Ng/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転ヘラ切
	138	瓶	环身	包含層(地山) HK		(4.6)		密	良	Ng/ 灰	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転ヘラ切
	139	瓶	环身	表土剥離 HK		(6.3)		密	やや 不良	2.5V8/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	
	140	瓶	环身	包含層(地山) HK		(7.2)		密	やや 良	5V8/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転ヘラ切
	141	瓶	甕	包含層(地山) HK				密	良	N4/ キメ	平行タタキ→カ キメ	ロクロナダ	同心円当て具
	142	土師器	甕	包含層(地山) HK				密	良	7.5V8/2 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	
	143	土師器	甕	包含層(地山) HK				密	良	10V8/3 淡黄褐	ロクロナダ	ロクロナダ	外面部
	144	瓶	环瓶	混瓦 (SD04)	(13.0)			密	良	7.5V8/1 灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
	145	瓶	环身	混瓦 (SD04)	(12.0)	3.7	(6.8)	密	良	2.5V7/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	
	146	土師器	壺	混瓦 (SD04)				密	良	7.5V8/6 緑	ロクロナダ	ロクロナダ	
	147	床脚	甕	混瓦 (SD04)				密	良	N4/ 灰	平行タタキ	当て具	
	148	瓶	甕	包含層(地山) 灰瓦 (SD04)	(21.0)		自然軸	密	良	N5/ 灰	ロクロナダ タタキ→カキメ	ロクロナダ	同心円当て具
	149	瓶	甕	灰瓦 表土直下				密	良	N5/ 灰	タタキ	ロクロナダ	同心円当て具

第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

1はじめに

富山県富山市の友坂遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている（第2節参照）。

2 試料と方法

試料は、古代と中世の土器・陶磁器が共伴した井戸SE27から出土した生材（井戸枠縦板）1点（試料No.1:PLD-37565）と、10世紀代の土器が共伴した土坑SK11から出土した炭化材1点（試料No.2:PLD-37566）の、計2点である。試料No.2には最終形成年輪が残っていたが、試料No.1には最終形成年輪が残っていなかった。測定試料の情報、調製データは第2表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

第2表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-37565	試料No.1 遺構: SE27 遺物: 45	種類: 生材（スギ） 器種: 井戸枠材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N）
PLD-37566	試料No.2 遺構: SK11	種類: 炭化材（モモ） 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N）

3 結果

第3表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ¹³C）、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、第17図に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差(±1σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

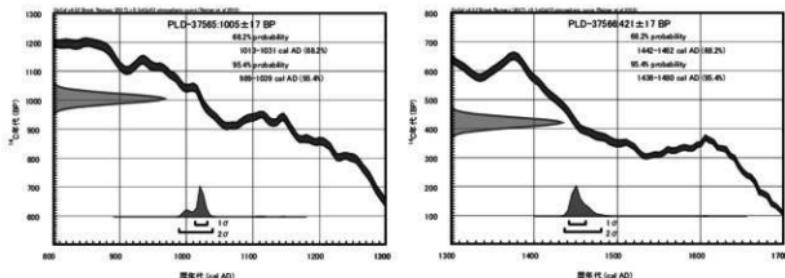
なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の曆年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ:IntCal13)を使用した。なお、1σ曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、

第3表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-37565 試料No. 1 SE27	-23.71 ± 0.21	1005 ± 17	1005 ± 15	1013-1031 cal AD (68.2%)	989-1039 cal AD (95.4%)
PLD-37566 試料No. 2 SK11	-23.58 ± 0.23	421 ± 17	420 ± 15	1442-1462 cal AD (68.2%)	1436-1480 cal AD (95.4%)



第17図 暦年校正結果

同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

4 考 察

以下、 2σ 暦年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。

SE27の試料No.1は、989-1039 cal AD (95.4%)で、10世紀後半～11世紀前半の暦年代を示した。これは、平安時代中期に相当する。なお、試料には最終形成年輪は残っていない。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料はいずれも古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

発掘調査所見ではSE27は中世と考えられており、測定結果の方が古い暦年代を示した。試料は最終形成年輪が残っていない井戸枠材であり、古木効果の影響を受けて測定結果が古い暦年代を示したと考えられる。

SK11の試料No.2は1436-1480 cal AD (95.4%)で、15世紀前半～後半の暦年代を示した。これは、室町時代に相当する。なお、試料には最終形成年輪が残っており、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。

発掘調査所見では、SK11は10世紀代と考えられており、測定結果の方が新しい暦年代を示した。室町時代の土坑内に、10世紀代の土器が流れ込んだ可能性が考えられる。

（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ（伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・小林克也））

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337–360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3–20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887.

第2節 樹種同定

1 はじめに

真羽丘陵の東麓に位置する友坂遺跡から出土した木材について、樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(第1節参照)。

2 試料と方法

試料は、井戸 SE27 から出土した生材の井戸枠縦板 1 点と、土坑 SK11 から出土した炭化材 1 点の、計 2 点である。放射性炭素年代測定の結果では、井戸枠は平安時代中期、炭化材は室町時代の曆年代を示した。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

生材の樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後、乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行った。

炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行った。

3 結果

同定の結果、SE27 の井戸枠材は針葉樹のスギ、SK11 の炭化材は広葉樹のモモであった。同定結果を第4表に示す。

第4表 出土木材の樹種同定結果一覧

試料No	遺物No	遺構	器種	樹種	木取り	種類	年代測定番号
1	45	SE27	井戸枠材	スギ	板目	生材	PLD-37565
2	—	SK11	炭化材	モモ	みかん割り？	炭化材	PLD-37566

以下に、同定された材の特徴を記載し、第18図に光学顕微鏡・走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) シギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don ヒノキ科 第18図 1a-1c (No. 1)

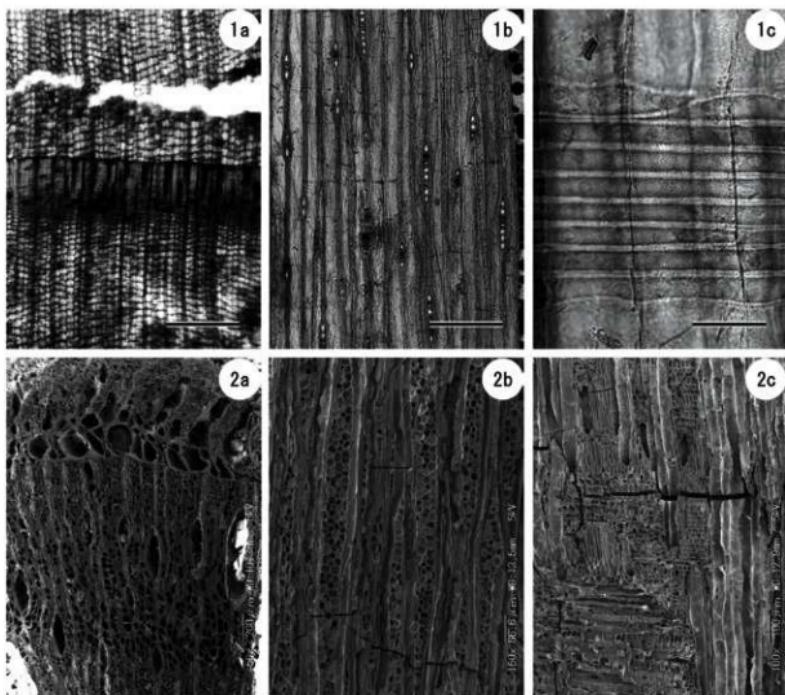
道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ2~15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

シギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(2) モモ *Prunus persica* (L.) Batsch バラ科 第18図 2a-2c (No. 2)

年輪のはじめに中型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が単独ないし2~3個複合してやや密に散在する半環孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は單穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は平伏、方形、直立細胞が混在する異性で、幅1~5列である。

モモの原産地は中国北部で、平安時代には果実を食用や薬用として利用するために日本列島でも栽培されていた樹木である。材は重硬で、切削加工等は困難である。



1a-1c. シギ (No. 1)、2a-2c. モモ (No. 2)

a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=50 μm)

第18図 出土木材の光学顕微鏡・走査型電子顕微鏡写真

4 考 察

SE27の井戸枠は、スギであった。スギは木理通直で真っすぐに生育し、加工性が良い樹種である（伊東ほか2011）。平安時代の富山県内の井戸枠ではスギが多く出土しており（伊東・山田編2012）、傾向は一致する。

SK11の炭化材は、モモであった。試料は燃料材の残渣などの可能性が考えられるが、詳細は不明である。モモは堅硬で加工性は良くない樹種であり、薪炭材などとしては顕著には利用されない樹種である（平井1996）。なお、モモは中国原産であり、日本では自生していない。そのため遺跡周辺でモモが栽培され、木材を薪炭材などとして利用していたと考えられる。

（株式会社パレオ・ラボ 小林克也）

引用文献

- 平井信二（1996）木の大百科－解説編一、642p、朝倉書房。
伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌、238p、海青社。
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース一、449p、海青社。

第3節 地山の土壤観察

はじめに

友坂遺跡は富山県富山市婦中町友坂に所在する集落・城館跡である。発掘調査では、奈良～平安時代、鎌倉～戦国時代、江戸時代の遺構・遺物が確認されている。特に室町～戦国時代の居館は有力者の居住城として注目されている。遺跡は神通川の支流である井田川左岸に位置し、第19図に示した国土地理院土地条件図（国土地理院2005）によると、現状は氾濫平野に分類され、遺跡のすぐ西側は干拓地となっており、井田川の埋没した旧河道が理解される。発掘調査では調査地点の堆積層序を、耕作土（I層）、地山である黄橙色シルト（II層）、灰黃褐色砂質土（III層）に分層している。上述した各時期の遺構は、II層を遺構確認面として検出されるとともに、検出面の地山となり、II層は古代の遺物を多く包含している。ゆえに堆積の成因の検討が必要となった。

本分析調査では、II層を角柱状に採取したブロックサンプルを試料として、その堆積について検討を行う。

1 試 料

試料は、友坂遺跡調査区内で採取されたII層の角柱状ブロックサンプル1点である（試料名：TMSK地山土サンプル）。層厚約35cm、横約18cm、奥行き約18cmの角柱状を呈す。



第19図 調査地点周辺の土地条件図
(国土地理院2005を一部改変)

2 分析方法

受領した試料の梱包を解き、状況を写真で撮影する。その後、4側面について両刃鎌で表面を整え、写真撮影および肉眼・ルーペによる観察を実施し、堆積物の詳細について記載する。各側面の写真は第20図に示す。

観察・記載については、堆積物の基質、粒径、層間の不整合の有無、混在物、色調、孔隙、堆積構造の有無などについて行う。色調については新板標準土色帖（小山・竹原1976）を参照し、結果の記載にはマンセル記号を併記する。粒径、混在物、孔隙などの記載については土壤調査ハンドブック（日本ペドロジ学会編1997）などを参考とした。

結果は、堆積物の様相が明瞭な面の写真に、上述した各種の要素を記入したもの第21図に示すとともに、各層の詳細を述べる。

3 結 果

観察の結果、II層のブロックサンプルをIIa層、IIb層に大きく分層し、IIb層については層相の違いから、IIb-1～3層に細分した。また、IIb-1、IIb-2層については上部が腐植質の古土壤であり、それぞれIIb-1a、IIb-1bのように細分した。以下に各層の詳細を述べる。

IIa層：基質はにぶい黄褐色（10YR5/3）粘土質シルトである。孔隙やや少なく、締りは強い。粘性ややあり。根痕、糸痕状に褐色粘土（10YR4/1）が混在、5～15mmの炭化物が点在、点状マンガン結核が散在する。土器（土師器）を微量含む。

IIb-1a層：基質はにぶい黄褐色（10YR4/3）粘土質シルトである。孔隙やや少なく、締りはやや強い。粘性あり。破碎した偽縦状の褐色（10YR4/1）粘土ブロックが混在、赤色スコリア、2～5mmの炭化物が点在、点状マンガン結核が散在する。氾濫性堆積物を母材とし、土壤化が進んだ層と考えられる。下層とは漸移する。

IIb-1b層：基質はにぶい黄橙色（10YR6/3）粘土質シルトである。孔隙少なく、締りはやや強い。粘性ややあり。破碎した偽縦状の褐色（10YR4/1）粘土ブロックが混在、2～5mmの炭化物が点在、点状マンガン結核が散在する。下部に水性堆積に由来すると考えられる平行葉理が確認される。

IIb-2a層：基質はにぶい黄褐色（10YR4/3）粘土質シルトである。孔隙やや少なく、締りはやや強い。粘性あり。根痕、糸痕状に褐色（10YR6/1）粘土が混在、5mmの炭化物が点在、点状マンガン結核が散在する。氾濫性堆積物を母材とし、土壤化が進んだ層と考えられる。下層とは漸移する。

IIb-2b層：基質はにぶい黄橙色（10YR6/3）粘土質シルトである。孔隙少なく、締りはやや強い。粘性ややあり。根痕、糸痕状に褐色（10YR6/1）粘土が混在、2～5mmの炭化物が点在、点状マンガン結核が散在する。水性堆積に由来すると考えられる平行葉理が確認される。

II-3層：基質はにぶい黄褐色（10YR5/3）粘土質シルトである。孔隙少なく、締りはやや強い。粘性ややあり。根痕、糸痕状に褐色（10YR6/1）粘土が混在、点状マンガン結核が散在する。氾濫性の堆積物を母材とし、土壤化が進んだ層と考えられる。土器（土師器）を微量含む。

4 考 察

本分析調査で対象としたII層は古代の遺物を多く含むものの、古代の遺構検出面であり、地山と考えられている。以下に、観察結果から考えられるII層の成因等について検証する。

II層の基質は粘土質シルトであり、IIb-1、IIb-2層には平行葉理が確認される。このことから、II

層は氾濫堆積物と考えられ、洪水等により運搬されてきた土壌が堆積したと考えられる。砂や礫を含まないことから、運搬の営力は小さいものと考えられる。

各層には炭化物が見られること、土器片も混入することからも、何らかの人間活動の影響が想定されるが、サンプルには明瞭な不整合面が見られないでの、遺構等の覆土である可能性は低い。

IIb層は更に3層に細分できた。これは堆積が一度ではなく、複数回におよぶことに由来すると考えられる。IIb-1、IIb-2層は上部（IIb-1a、IIb-2a）が粘土化し、黒味が強い。これは土壌化によるものと考えられ、一定期間地表面であったために腐植が供給された可能性がある。一度洪水等で堆積した後に、しばらく時間を空けて次が堆積するという経過が想定される。

IIb-1a層に顕著であるが、破碎性の偽礫（粘土ブロック）が確認される。これらも氾濫洪水により運ばれたものと思われる。

IIa層については平行葉理などの堆積構造および土壌化の痕跡は認められなかった。何らかの人の為的改変行為が想定される。畑作等の可能性を検討されたい。IIb層に比して炭化材を多く含む。

以上の点を下位の層準からまとめると、

- ・ II層全体は不明瞭ではあるがわずかに平行葉理構造が確認されることから、氾濫洪水の堆積物としての痕跡を残していると考えられる。
- ・ II層下部（IIb層）では、氾濫洪水堆積が少なくとも3回確認される。その間、各地表面となる古土壤が形成されるが、同時に人間活動も想定され、炭化物や土器が加わる。
- ・ II層下部（IIb層）では、偽礫が多く含まれることから、人為改変の程度（回数？）は、IIa層よりも低い。
- ・ IIb-1a層に顕著な、破碎性の偽礫（粘土ブロック）は氾濫洪水が示唆される。
- ・ II層上部（IIa層）では、古土壤は無くほぼ堆積構造が無層理となり、土器も炭化物も加わることから、人為改変（畑作等？）の土地利用も検討されたい。
- ・ 各層には炭化物が認められること、土器を含むことから、人間活動の影響を受けていたことは明らかである。
- ・ 明確な不整合等が確認できず、また、その層相からも遺構の覆土を含むとは考え難い。

今後は、人為改変（畑作等？）の検討するために種実洗い出し分析、植物珪酸体分析、花粉分析を、堆積環境を検討するために珪藻分析、粒度分析などの自然科学分析を実施することが望まれる。

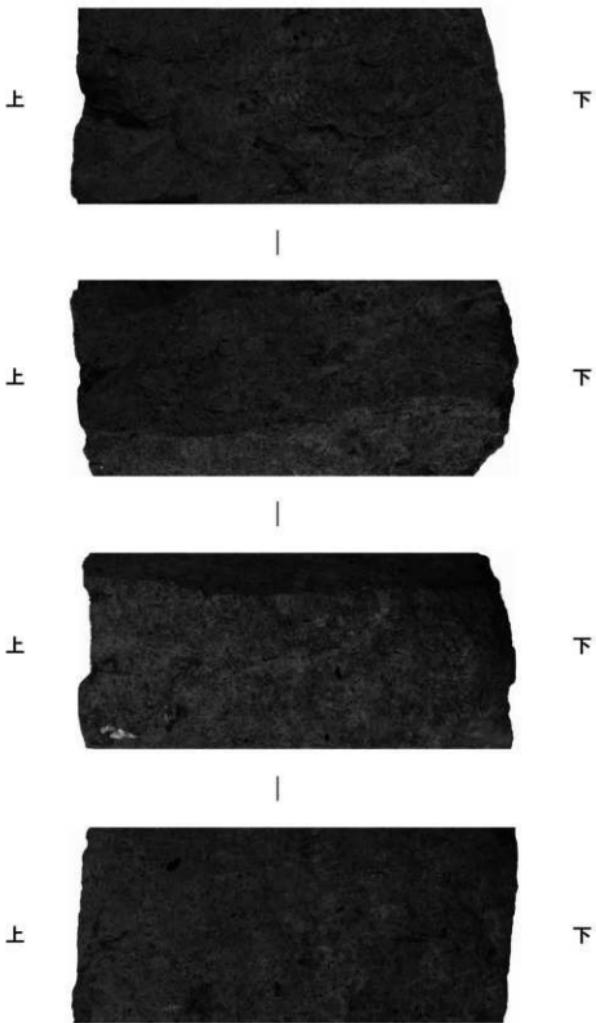
（パリノ・サーヴェイ株式会社 赤堀岳人）

参考・引用文献

国土地理院, 2005, 1/25000 富山, 土地条件図

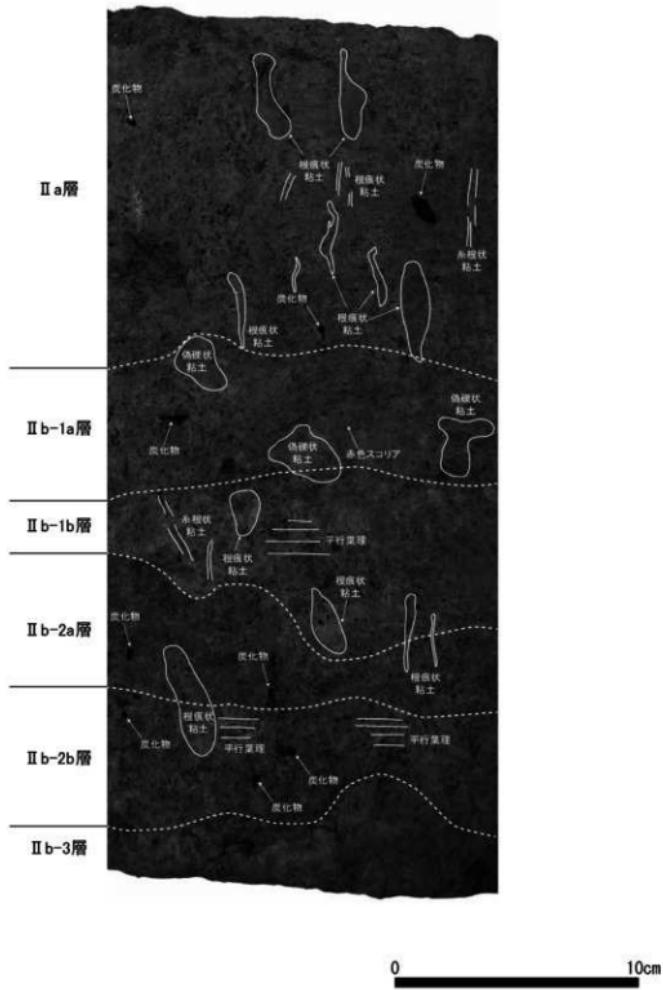
小山正忠・竹原秀雄, 1976, 新版標準土色帖

日本ペトロジー学会編, 2003, 土壌調査ハンドブック



第20図 柱状サンプル写真

0 10cm



第21図 柱状サンプル観察結果

第5章 総括

第1節 遺構の変遷からみた友坂遺跡

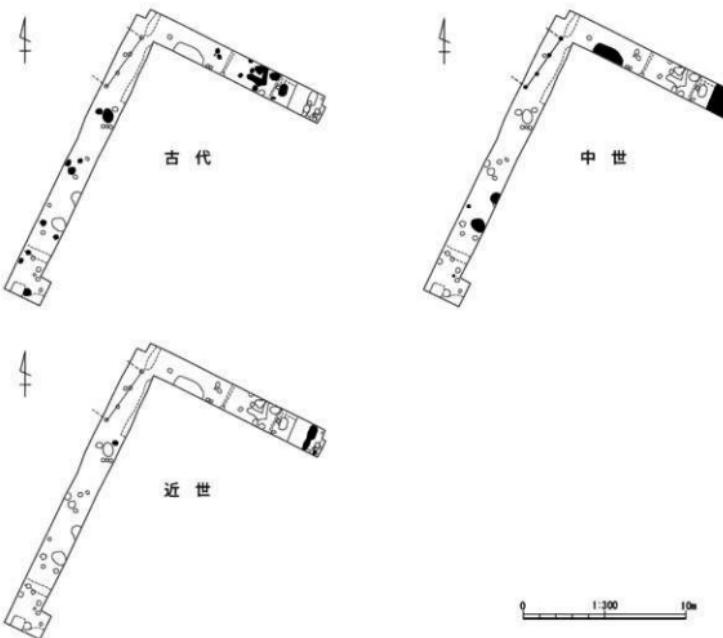
1 本節の趣旨

今回の調査では、古代から近世までの複数時期の遺構を検出した。本節では、まず遺構の変遷を整理して調査成果を総括する。また、友坂遺跡はこれまでの調査から、8世紀から17世紀まで継続して集落が営まれ、中世には居館が存在したことが判明している。これら既往の調査成果を含めて、友坂遺跡をめぐる問題について検討したい。

2 今回調査区における遺構の変遷

最初に遺構の変遷を概説すると、まず地山（II層）に8世紀後半から9世紀初頭の遺物が多く含まれておらず、この頃に地山が堆積したと想定される。

その後は、近世まで断続的に遺構が形成される。遺構の時期は、古代は9世紀初頭～前半と9世紀後半、中世は13世紀、15世紀中葉、16世紀後半、近世は17世紀後半と考えられる。遺物だけみれば、



第22図 遺構変遷図

このほかにも 8 世紀中葉、10 世紀のものがある。50 m²に満たない調査において、これだけ長期に及ぶ遺構・遺物が確認できたことは、これまで判明していた友坂遺跡の集落の継続性をさらに裏付けるものである。

以下、遺構の変遷をまとめる。

地山の堆積前（8 世紀中葉以前） 地山（II層）が堆積する前の段階である。II層下のIII層で遺構は確認できず、今回調査区に 8 世紀中葉以前の遺構は存在しない。III層は一部が礫層で、調査区北西部においてやや落ち込む状況が認められ、小路が存在するような状況があったかもしれない。いずれにしても本調査区ではこの時期、集落形成はなかったとみてよい。ただし、今回調査区の東側で行った昭和 56・57 年度調査や旧河道を挟んだ北側にある友坂天神遺跡では、それぞれ 8 世紀前半、7 世紀後半～8 世紀の遺構・遺物が確認されており、近辺に集落は存在する。実際、今回調査区でも 8 世紀中葉頃の遺物が少量出土していて、近くに集落の存在をうかがわせる。

地山の堆積（8 世紀後半～9 世紀初頭頃） 地山（II層）にこの時期の遺物が含まれており、当該期に遺構の基盤となる地山が形成されたと考えられる。地山の形成過程は第 4 章第 3 節の自然科学分析で考察されており、発掘成果も踏まえると次のような状況が推定される。

地山である II 層、特にその下部は平行葉理構造が確認され、地山の土壤は氾濫堆積物に由来すると考えられる。層の下部では少なくとも 3 回の氾濫堆積の痕跡が確認できる。地山に含まれる遺物は、ほぼ 8 世紀後半から 9 世紀初頭で、特段の時期差は認めがたい。よって、3 回以上の氾濫堆積は、短期間に間欠的に生じたと推測される。一方、地山の上部は堆積構造が無層理で、炭化物も下部よりも多く含むことから、人為的改変をより強く受けている。畑作による可能性が推定されているが、詳細は不明である。地山が土器を包含することになった要因については、次の 2 通りが考えられる。一つは、間欠的に生じた氾濫堆積の後に、その地表面で畑作等を含む活動が行われたことで土器が混入したケース、もう一つは氾濫により周辺から土器が流入してきたケースである。現状いずれか判断できないが、前者であるなら 8 世紀後半～9 世紀初頭時点での人の営為が始まっていたことになる。後者の場合は、近辺にこの時期の集落が存在したことを示す。

地山堆積後に古代の遺構が形成される。古代の遺構から出土する遺物は、地山出土遺物とあまり時期差が認められず、地山堆積後ほどなくして遺構が形成されるようになったと考えられる。

古代の遺構（9 世紀初頭頃以降） 第 22 図では、古代の遺物だけが出土した遺構を古代遺構として示したが、注意を要する。というのも、先述のとおり地山（II層）は古代の遺物を多く包含しており、中世以降の遺構であっても、埋没過程において古代の遺物が混入しやすい状況にあったためである。たとえば、近世の越中瀬戸が出土した SK21 は、近世遺物はこの 1 点のみでその他は古代の遺物である。また、SE27 も中世の珠洲と青磁が出土し、中世遺構と認められるが、多いのは古代の遺物である。明らかな擾乱 SD04 においても古代の遺物は複数出土している。こうした状況を踏まえると、たとえ古代の遺物しか出土していない遺構であっても、たまたま中世以降の遺物を含まなかっただけで、本来は中世以降となる可能性がある。したがって、第 22 図に古代として示した遺構の一部は、中世以降となる可能性を残すが、それを示す根拠がないため、ひとまず古代遺物のみが出土した遺構は当該期の遺構とする。

遺構出土遺物は、地山に含まれる遺物と大きな時期差がないものが多く、地山の堆積からほどなく遺構形成が始まったと考えられる。8 世紀後半から 9 世紀初頭とした地山出土遺物の時期を考慮すれば、遺構の主体は 9 世紀初頭から前半頃か。一部 9 世紀後半になるもの（SP34）もある。具体的に用途がわかる遺構はないが、土坑・ピットの一部が掘立柱建物を構成する可能性はある。

本調査区では8世紀から9世紀への移行期頃から、集落形成が進んだと推定できる。

中世の遺構 井戸や掘立柱建物がある。掘立柱建物は古代の土師器が数点出土したが、柱穴の構造や周辺の調査例からみると中世遺構の可能性が高く、遺物は混入と推測する。また、先述のとおり、古代とした遺構の中に本来は中世遺構だったものが含まれている可能性があり、当該期の遺構はもう少し増えるかもしれない。

時期が判明する遺構として、13世紀前半の井戸SE27、13世紀中葉～後半のSX40がある。SP56も13世紀代か。このほかSK11が15世紀中葉、SP54が16世紀後半とみられる。掘立柱建物は遺物からは時期を知れないが、近接する井戸とのセット関係でとらえるなら、同じ13世紀前半が想定できる。軸方向も一致しており同時期としても矛盾はない。

北東約400mの朝日小学校で実施された調査では、大溝や土橋等の中世居館遺構が検出され、12世紀～15世紀に存在したと考えられている（婦中町教委1984・1993、宇野ほか1991）。本調査区の中世遺構は、この居館とほぼ時期が重なり、居館周囲に展開した集落遺跡として把握できよう。居館の存続期間と同様、集落も長期にわたりて営まれたことがうかがえる。

近世の遺構 密度は薄いが、溝や土坑がある。数少ない遺物から判断すると、17世紀後半を中心とする時期とみられる。東側の平成8年度調査区（第1図）では、16世紀～17世紀前半の鍛冶もししくは小規模な製鉄関連の作業場が営まれていたとされる（婦中町教委1997）。本調査区は、近世と断定できる生産遺構・遺物は確認しておらず、居住域あるいはその縁辺部とみた方がよいだろう。友坂遺跡では、中世居館の廃絶後も生産域を伴う集落が存続し続けたことがわかる。

3 友坂遺跡をめぐる考古学的検討

遺跡の環境 友坂遺跡は井田川左岸の氾濫平野に位置しており、井田川の影響を被ってきたことが想定できる。一方、すぐ西側の呉羽丘陵沿いは地籍図から旧河道の存在が指摘できる（第23図・婦中町教委1997）。旧河道は現在の友坂集落を抱き込むように蛇行しており、この河道の影響も小さくなかったと思われる。旧河道がいつまで流路として存在したかを直接知る手がかりはない。ただし、今回調査区は、8世紀後半～9世紀初頭頃の氾濫による地山堆積後は、近世まで継続して集落が営まれている。旧河道と関連させてみれば、旧河道の影響がなくなったために集落を安定的に営むことができるようになった、すなわち旧河道は8世紀後半～9世紀初頭後に流路としての機能を失ったことを想定できるかもしれない。

地割について 本調査区では古代から近世の遺構を確認したが、それぞれの時期の遺構の主軸をみると、古代から近世までほぼ同じ軸で遺構が形成されていることを確認できる。

同じことは友坂遺跡の他の調査区でも追認できる。平成8年度調査区では古代の溝と中世末～近世初頭の溝がほぼ同じ方位で掘られており（婦中町教委1997）、平成4年度調査でも中世居館を囲む大溝と古代の竪穴住居・溝が同じ方位で掘られている（婦中町教委1993）。さらに言えば、現代の地割もこれら遺構と軸方位がほぼ揃っている。つまり、古代から近世、さらに現代に至るまでほぼ同じ地割を踏襲して居館や集落が営まれ続けてきたといえる。

これは、巨視的にみれば、東を流れる井田川と西にある呉羽丘陵の方向に規定されたものと思われるが、局所的には本章第2節で推定している、現在の友坂集落を通る県道68号線が熊野神社・友坂寺に続く道であったことと関係していると思われる。古代以来の参道として、また集落を通るメインストリートとしての道を基準として、居館や集落の地割が踏襲されてきた可能性がある。

中世の友坂遺跡 第2節において、中世における友坂地区周辺は、古代以来の信仰地としての側面

を保ちつつ、軍事的・政治的な拠点としての性格も強くなることを指摘している。そのことを裏付けるように、昭和 56・57 年度、平成 4 年度の調査では、現在の朝日小学校のある場所で居館に伴う遺構が見つかっている（婦中町教委 1984・1993）。それによれば、居館は 12~15 世紀に存在し、二重の溝が方形にめぐる状況が確認できる（ただし、二重の堀は同時併存ではない可能性も指摘されている）。溝の内部には、複数の掘立柱建物や櫓がある。一部の調査であるため、溝で囲まれた方形区画の規模は不明である。

この場所に居館が営まれたのは、交通ルートとの関連でみると理解しやすい。居館があった場所のすぐ東側は、現在県道 59 号線が通る（第 1 図）が、近世はこのやや東側に飛騨街道の脇道があった（富山県教委 1982）。これが中世においても重要な南北ルートであった可能性がある。さらに、先述した友坂集落を通る現在の県道 68 号線も古代以来の道として、呉羽丘陵を越えて西の射水方面に向かうルートであったと思われる。居館はその交差点近くに位置し、要衝にあったと考えられる。

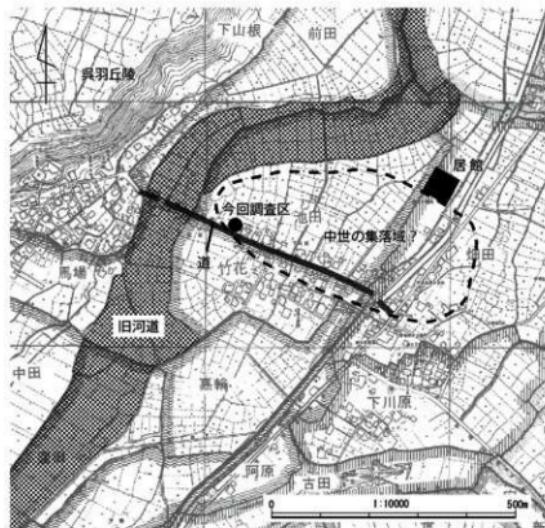
埋蔵文化財包蔵地範囲や地籍図、過去の調査成果を考え合わせると、居館は友坂遺跡の北部に存在し、その南側に集落が展開していたと推定できる（第 23 図）。

集落の広がりについて注意したいことは、これまでの調査で遺跡を確認した地点は、現在の県道 68 号線より北側に集中し、道路を挟んで南側はほとんど遺跡が確認されていない事実である。つまり、先述した古代以来の道と推定される現在の県道 68 号線より北側が、集落の中心部とみられる。字名も県道を境に北側が「池田」、南側が「竹花」と異なる。ただし、県道の南側でも一部遺跡が確認されている場所もあり、集落が皆無というわけではなくさうである。試掘調査等によれば、県道より南側は地山がより深い位置で検出されることがある。南側で古代から近世までほとんど遺構が確認され

ないのは、こうしたやや低い地形が氾濫原における集落の立地として適さなかったことに起因するのかもしれない。

今回調査区は、居館のあった場所からみれば南西に約 400m 離れた位置にある。一方、すぐ西側は旧河道が存在する。中世段階に河道が流路として機能していたか不明だが、河道跡として落ち込む地形があったことは推測できる。つまり、今回調査区は（旧）河道を背後に控えた集落の西端付近に位置するとみてよい。13 世紀から 16 世紀後半まで複数時期の遺構が確認されたことは、長期にわたり集落として機能し続けたことを示している。

（野垣）



第 23 図 中世における友坂遺跡（富山県教委 1979 を改変）

第2節 友坂地区周辺における古代から中世の歴史環境

調査を行った友坂地区周辺において、中心的な役割を担う社寺である熊野神社と友坂寺（現在の永源寺）を軸に古代から中世の様相を概観し、検出遺構・出土遺物と文献史料から今回調査区の性格を検討する。

古代の様相 熊野神社の由来は、郷を襲う大蛇から住民を救うために一の宮親王が熊野加武呂命を祀ったところ大蛇は姿を見せなくなり、大宝2年（702）に大社を建立して祭祀を行うようになったことによる。一の鳥居は「朝日村大字下条村舊四つ屋」にあり、本殿まで8丁余り（約873m）ある道の両側に石燈籠が多く並列し、二の鳥居は「大字友坂村領竹花」にあり、その両側には人家が軒を連ねていたことから門前町と称していたとされ、熊野神社の境内には社家のほか友坂寺、金乗坊、光明寺など24坊があったと伝えられる（富山県婦負郡役所1909）。

友坂寺の創建は大宝元年であり、大同年間には正念院覺心坊と称していたが、のちに大徳山友坂寺と改称した。前述の熊野神社の別当寺であり（註1）、七堂伽藍で敷圓坊、西智坊、一倫坊、西塔坊など48坊を有し、平安時代に最盛期を迎えたようである。また、かつて下条地区の小字に「御旅屋」があり、そこは「永源寺の往古隆昌なりし時諸國より參詣客多かりしがため旅館のありし所なりといふ字地今尚存せり」（富山県婦負郡役所1909）と伝わる。

古代における友坂地区周辺は、熊野神社とその別当寺である友坂寺に隣接する信仰地の集落および門前町の性格を有していたといえる。

中世の様相 平安時代末期の寿永2年（1183）に熊野神社と友坂寺は兵火にあう。この年、源義仲の軍勢が越中に入り、友坂寺の島倉治部少輔らが応戦したが、敗北して堂はすべて焼けてしまう（富山県婦負郡役所1909）。この時の源義仲の軍勢は奥羽山を越えて般若野に向かう途上であったと推測される。熊野神社と友坂寺を攻めた理由については兵火によって関連史料が焼失したとされるため、文献史料によって確認することができず、課題が残る。

中世の文献史料では熊野神社を構成する僧房の名称が散見できる。『超勝寺下分并本覚寺下分書上』（本願寺文書）（富山県1975）では「本覚寺下分」の「越中衆」に「トモサカ金乗坊」「光明寺」とある。この史料は年紀を欠くものであるが、戦国時代前期のものと推定されている。また、永祿7年（1564）の『本願寺番錢帳』（長光寺文書）（富山県1975）では越中諸寺に対する本願寺へ納める錢の額が寺院別に示されており、婦負郡では「金乗坊」が「五百文」、「大徳寺」「光明寺」が「三百五十文」、「中堂寺」が「三百文」と定められている。このうち「金乗坊」については、前述の『超勝寺下分并本覚寺下分書上』の内容から熊野神社を構成していた僧房のひとつであろう。「大徳寺」「光明寺」については友坂地区もしくはその周辺の寺院である可能性を含む。『本願寺番錢帳』にみられる番錢の額は200～500文であり、「金乗坊」が負担する「五百文」は最高額に属する。それだけの負担を求められる「金乗坊」は当時の越中国内における淨土真宗寺院のなかでも多くの信徒を抱える規模であったと推測できる。友坂寺については、永祿元年に永源寺と改名しており（婦中町教委1991）、「友坂」の地名の由来は友坂寺が改称したことにより、その名をとって名付けたことによる（富山県婦負郡役所1909）。

次に示す史料は『政所賦銘引付』である（富山県1975）。

一、小田図書助知憲 — (文明十六年) 五・十三、 高修

知行分越中国婦負郡内下条地頭職半分事、就督錢之儀、商人坂本背戸在家越中屋次郎
男仁預置候処、不遂算用之間、雖催促候令無沙汰、剩不如令領主代官職事契約守護方
輩云々、被召上彼男、可預御糺明之由申之、

この史料から文明 16 年（1484）に下条の地が小田氏の所領であり、史料中に登場する小田図書助知憲がその地頭職であったことがわかる。小田氏については長享元年（1487）に 9 代将軍足利義尚が近江の六角氏を攻めた際の奉公衆の二番衆に「越中小田伊賀守」、五番に「越中小田右馬助」の名がみえる（富山県 1975）。これらの人物は史料中の小田図書助知憲の子とされている（石川県図書館協会 1973）。奉公衆は将軍直属の軍事機構として 3 代将軍足利義満の頃に整備され、地元国人衆のほか有力守護家の庶子等を將軍の直臣として被官化し、有力守護家内部に分断を生じさせる要因ともなった（桜井 2001）。この奉公衆の所領は全国各地に所在し、守護による税の徵収は停止されていた。奉公衆の所領は莊園の所職を宛がわれるかたちで行われたが、その多くは具体的な所職が判然としない（富山県 1984）。しかし、史料中の小田氏は下条の「地頭職」であることが明確となっている。また、昭和 56・57 年度、平成 4 年度の友坂遺跡の発掘調査では、中世の居館跡の構造を検出している（婦中町教委 1984・1993）。居館跡は 12~15 世紀と考えられ、小田氏の居館と推定されている（富山県埋蔵文化財センター 2006）。小田氏が下条地頭職に任じられていることは、奉公衆の有する特性からみたとき守護・守護代への牽制の意が含まれていると考えられることから、下条・友坂地区は婦負郡を統治する側面からみると、重要戦略拠点としての性格を有していたといえよう。

16 世紀半ばになると、越後の上杉謙信（註2）による越中侵攻が顕著になる。

去五日於金屋村一戰、尽粉骨於鎧下、頸一討捕、殊被鎧疵、無比類讐神妙候、依致忠節、

四郎左衛門尉跡職申付候、弥於向後無如在可馳走候、謹言

十月十九日

長職（花押）

寺島牛介殿

この史料は永禄 5 年に上杉謙信が神保氏とそれに与する国人衆を攻めた際、10 月 5 日の金屋村の戦いにおける寺島牛介の忠節に対し、「四郎左衛門尉跡職」を神保長職が給与したことを示しており、「金屋村」は婦負郡金屋村のことと考えられる（富山県 1984）。また、熊野神社には上杉謙信による侵攻が伝わっており、幾度の兵火にあったとされている（註3）。このように友坂地区とその周辺は神保氏と上杉氏の争いによる影響が大きかったようである。

中世における友坂地区周辺は、寿永 2 年の兵火で熊野神社と友坂寺が被害を受けるも信仰地としての側面を保ち、加えて軍事的・政治的な拠点としての性格も強くなってきたといえよう。

出土遺構との関連性 今回調査区について、熊野神社と友坂寺への参道沿いもしくは近辺である可能性を指摘しておきたい。前述したように友坂地区の小字「竹花」にかつて熊野神社の二の鳥居があるとされており、現在の小字を確認すると「竹花（竹ノ花）」が今回調査区近辺に確認できる（富山県教委 1979）。第 25 図は、「長澤地図」（富山市公文書館蔵 明治 40 年頃作成）と現在地図を合成したものである。「長澤地図」には鳥居が記されており、その位置から熊野神社を指すものと考えられる。また、現在友坂地内を通る県道 68 号線にあたる道がみてとれ、その道は熊野神社へと通じている。他に熊野神社へと通じる道は記されていないため、この道が熊野神社への参道を示している可能性がある。また、現在の県道 68 号線沿いにある朝日簡易郵便局付近には熊野神社の祭礼時に旗を掲げる竿が設置されており（第 24 図）、これはかつてこの付近に鳥居が存



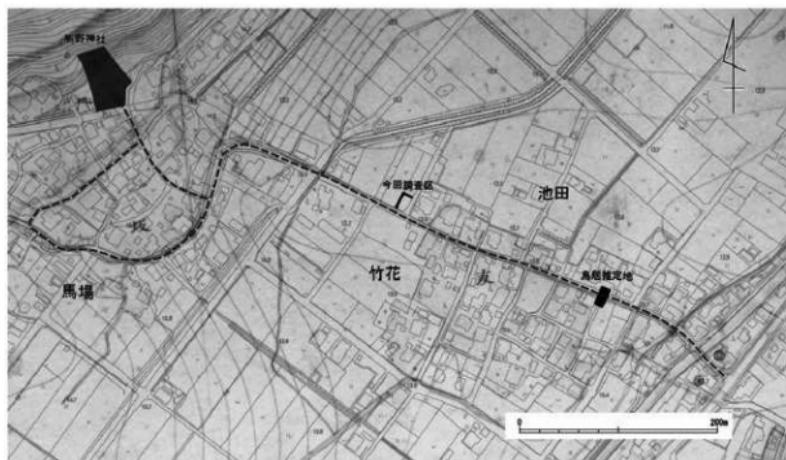
第 24 図 熊野神社の鳥居があつたと伝わる場所
(現在の県道 68 号線 朝日簡易郵便局付近)

在したことによるものと伝わっている(註4)。しかし、門前町には小字「嘉輪」(竹花の南に位置)が範囲に含まれるとされ(富山県神社庁 1983)、熊野神社への参道のルートに関しては不明な点が多いが、「長澤地図」に記される熊野神社の配置と道の関係性をみると、現在の県道 68 号線にあたるルートが熊野神社への参道である可能性が強いとみていいだろう。この推定に基づくと、現在の県道 68 号線に面する今回調査区は、熊野神社と友坂寺への参道沿いもしくはその近辺である可能性を考えることができる。しかし、今回の検出遺構と出土遺物から参道を直接的に示すものはない。一方、包含層(地山)出土遺物の中心は奈良・平安時代(8世紀後半から9世紀初頭)であり、熊野神社と友坂寺が隆盛を誇ったと伝わる時期と一致する。調査区近辺にこの時期の集落が存在していたことを示す。

小田氏の居館が存在したと推定される 12~15 世紀に関連するものとして、掘立柱建物 SB67 がある。また、青磁と珠洲が出土した井戸 SE27 は 13 世紀前半とみられる。これらの遺構・遺物は小田氏の居館との直接的な関係を示すものとはいえないが、今回調査区が小田氏の居館周辺に構成されていた集落であることを示すと考える。

以上のことから今回調査区とその周辺は、古代において信仰地である熊野神社とその別当寺である友坂寺に隣接し、その参道近辺の集落という性格を有し、中世になるとその性格に加え、戦略的拠点としての居館周辺を構成する集落という側面も強くなつていったといえる。

(宮田)



第25図 熊野神社への参道推定図(「長澤地図」(富山市公文書館蔵)と富山市基本図を合成)

註

- (1) 奈良～平安時代の神仏習合では、広く神宮寺が建立されている。
- (2) 永禄 5 年の越中侵攻時は上杉輝虎であるが、上杉謙信と表記する。
- (3) 「大徳山水源寺由緒記」による。
- (4) 友坂地区住民の証言による。

引用・参考文献

- 朝日校下史編纂委員会 2001『新世紀朝日校下史』
- 栗島義明 2012「コハクの利用と觀文社会」『考古学ジャーナル』No.627 ニューサイエンス社
- 石川県図書館協会編 1973『越中史徵』富山新聞社
- 宇野隆夫ほか 1991「友坂遺跡」『故郷遺跡出土の土器・陶磁器』北陸中世土器研究会
- 大村正之 1931「吳羽山古墳横穴剣」『富山県史跡名勝天然記念物調査報告』第11集 富山県学務部
- 鐘方正樹 2003『井戸の考古学』同成社
- 桜井英治 2001『日本の歴史12 室町人の精神』講談社
- 高瀬重雄監修 1994『富山県の地名』日本歴史地名大系16 平凡社
- 高橋浩二 2007『富山の古墳一氷見・御請の首長と日本海』
- 田嶋明人 1988「古代編年軸の設定」『北陸古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 富山県 1975『富山県史 史料編II 中世』
- 富山県 1976『富山県史 通史編I 原始・古代』
- 富山県 1984『富山県史 通史編II 中世』
- 富山県教育委員会 1979『婦中町安田城跡・魚津市佐伯遺跡』
- 富山県教育委員会 1982『富山県歴史の道調査報告書』富山県郷土史会
- 富山県神社宇編 1983『富山県神社誌』
- 富山県婦負郡役所 1909『越中婦負郡志』
- (公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2015『平岡遺跡発掘調査報告』
- (公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2016『野下・新開遺跡発掘調査報告』
- 富山県埋蔵文化財センター 2006『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』
- 富山市教育委員会 1973『上堤也遺跡』
- 富山市教育委員会 1974『境野新遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 1975『杉谷(A-G-H)遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 1976『富山市古沢・金星地内古墳概要調査報告書』
- 富山市教育委員会 2000a『向野池遺跡』
- 富山市教育委員会 2000b『西金星空跡発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 2001a『開ヶ丘中山IV遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2001b『向野池遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002a『開ヶ丘中山III遺跡 開ヶ丘中山IV遺跡 開ヶ丘中山V遺跡 開ヶ丘孤谷遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002b『境野新南II遺跡 池多東遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002c『向野池遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002d『御坊山遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002e『柄谷南遺跡発掘調査報告書III』
- 富山市教育委員会 2002f『開ヶ丘中山I遺跡 開ヶ丘中山IV遺跡 開ヶ丘孤谷遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2003a『北押川C遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2003b『開ヶ丘中山III遺跡 開ヶ丘孤谷III遺跡 開ヶ丘ヤシキダ遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2003c『開ヶ丘中遺跡 開ヶ丘孤谷III遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2003d『開ヶ丘孤谷III遺跡 開ヶ丘中山I遺跡 開ヶ丘中山IV遺跡 開ヶ丘孤谷IV遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2004a『開ヶ丘孤谷III遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2004b『開ヶ丘孤谷III遺跡 開ヶ丘孤谷II遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2005『池多南遺跡・池多南II遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2006『向野池遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2007『開ヶ丘中遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2007b『金扇南遺跡発掘調査報告書IV』
- 富山市教育委員会 2008『北押川B遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2008b『富崎遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2008c『北押川C遺跡 御坊山遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2014『富山市内遺跡発掘調査概要XI-北代村卷V遺跡・友坂遺跡・吉作遺跡-』
- 富山市教育委員会 2015『二本榎遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2017『富山市内遺跡発掘調査概要XW-境野新南III遺跡-』
- 西井龍蔵・藤田富士夫 1976「吳羽山丘陵の先土器・繩文時代草創期の遺跡について」『大境』第6号 富山考古学会
- 婦中町教育委員会 1984『友坂遺跡調査報告書』
- 婦中町教育委員会 1984『蓮花寺遺跡の調査』
- 婦中町教育委員会 1991『婦中町の歴史年表』
- 婦中町教育委員会 1993『友坂遺跡発掘調査報告書II』
- 婦中町教育委員会 1996『千坊山遺跡(2)』
- 婦中町教育委員会 1997『友坂遺跡発掘調査報告書III』
- 婦中町教育委員会 2004『各頤寺前遺跡発掘調査報告II』
- 堀内大介 1998『婦中町下邑東遺跡出土の高台付平瓶』『大境』第15号 富山考古学会
- 堀内大介 2017『近世土師器皿・越中瀬戸素焼皿の集成』『富山市考古資料館紀要』第36号
- 宮田進一 1997『越中瀬戸の変遷と分布』『中・近世の北陸』桂书房
- 望月精司 2006『第V章 A地区とD地区で出土した古代遺物』『領見町遺跡I』小松市教育委員会
- 森 隆 2005『富山県の中世土器(資料編Ⅱ)』『富山考古学研究』第8号 財富山県文化振興財団埋蔵文化財委員会調査事務所吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

図版1
調査区全景



調査区全景（北東から）



調査区南部 - 中央部（北東から）



調査区南部（北東から）



調査区北部（東から）



SK01 (北東から)



SK09・SP07・SP08 (西から)



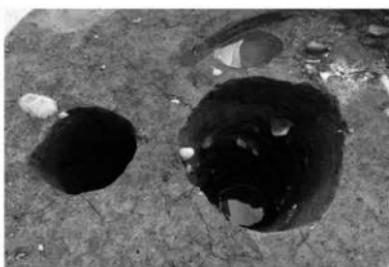
SK09 遺物出土状況 (北西から)



SK09・SP07・SP08 (西から)



SK11・SP10 (北西から)



SP12・SP13 (東から)



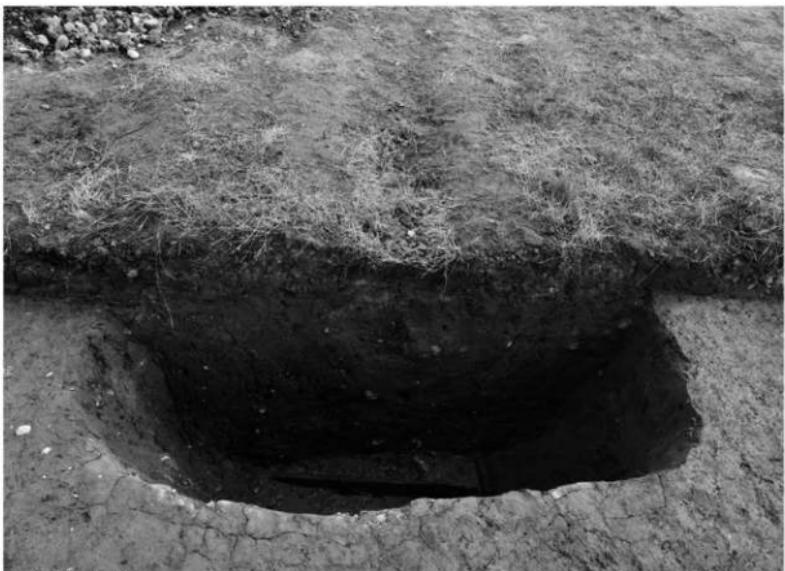
SK19～21・SP16～18 (南東から)



SP28～32 (南東から)

図版
4

遺構
(2)



SE27 (北東から)



SE27 井戸枠 (北東から)



SB67 柱列（北東から）



SB67 (SP25) (南から)



SB67 (SP44) (南から)



SP34 (南から)



SP36・SK35 (南から)



SK38 (南東から)



SK55 (南西から)



SX40（北西から）



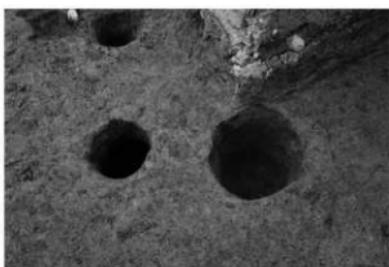
SX40 棟出土面の裸出土状況（南から）



SD58（南東から）



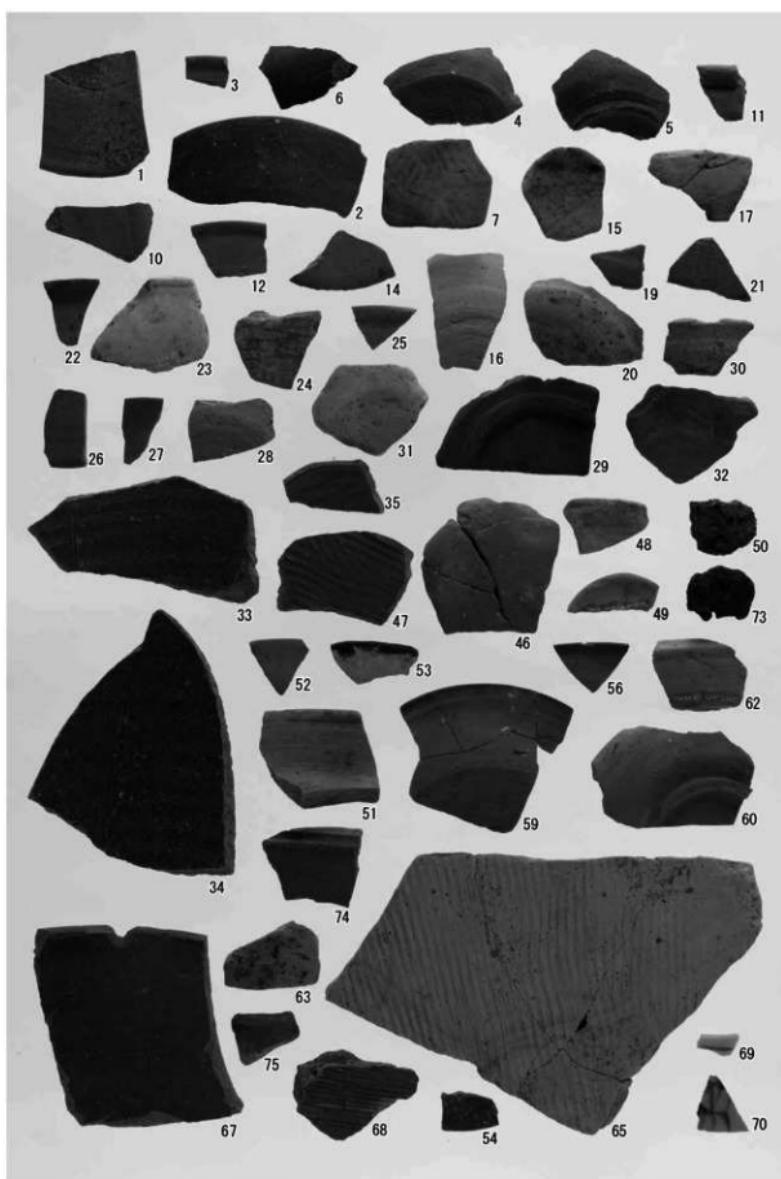
地山（Ⅱ層）掘り下げ後の裸層検出状況（北東から）

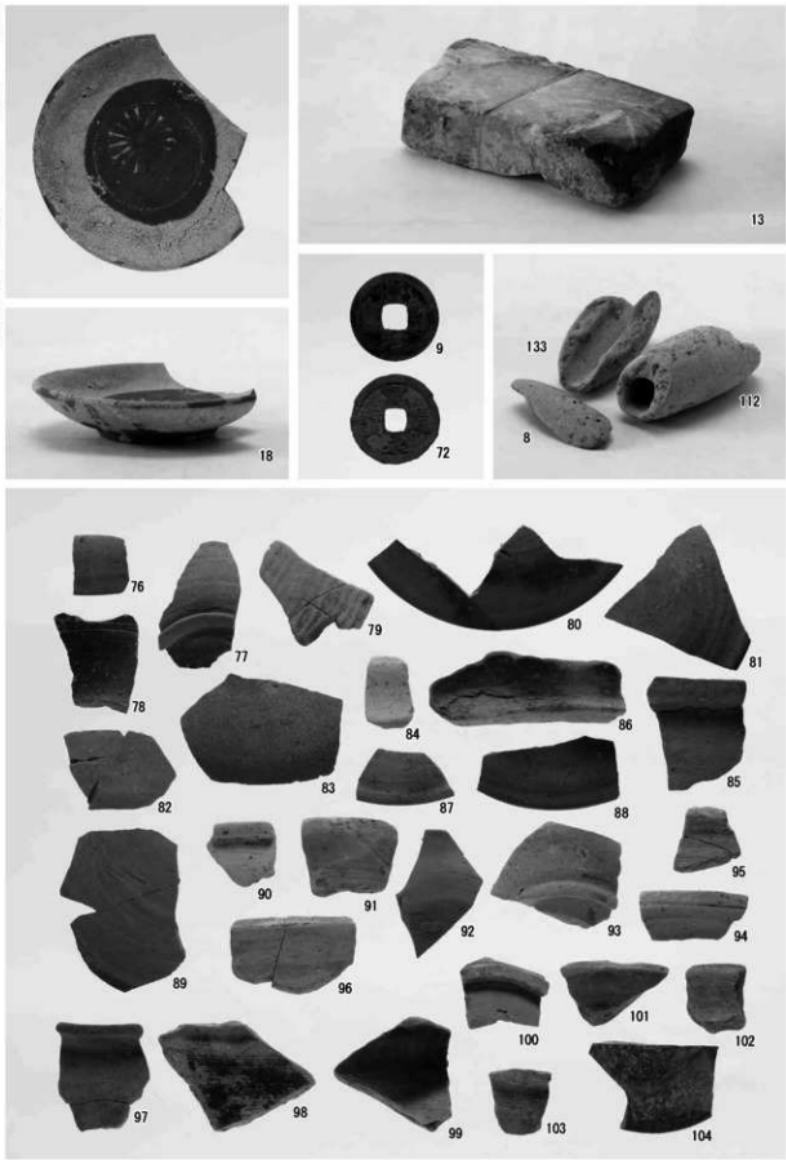


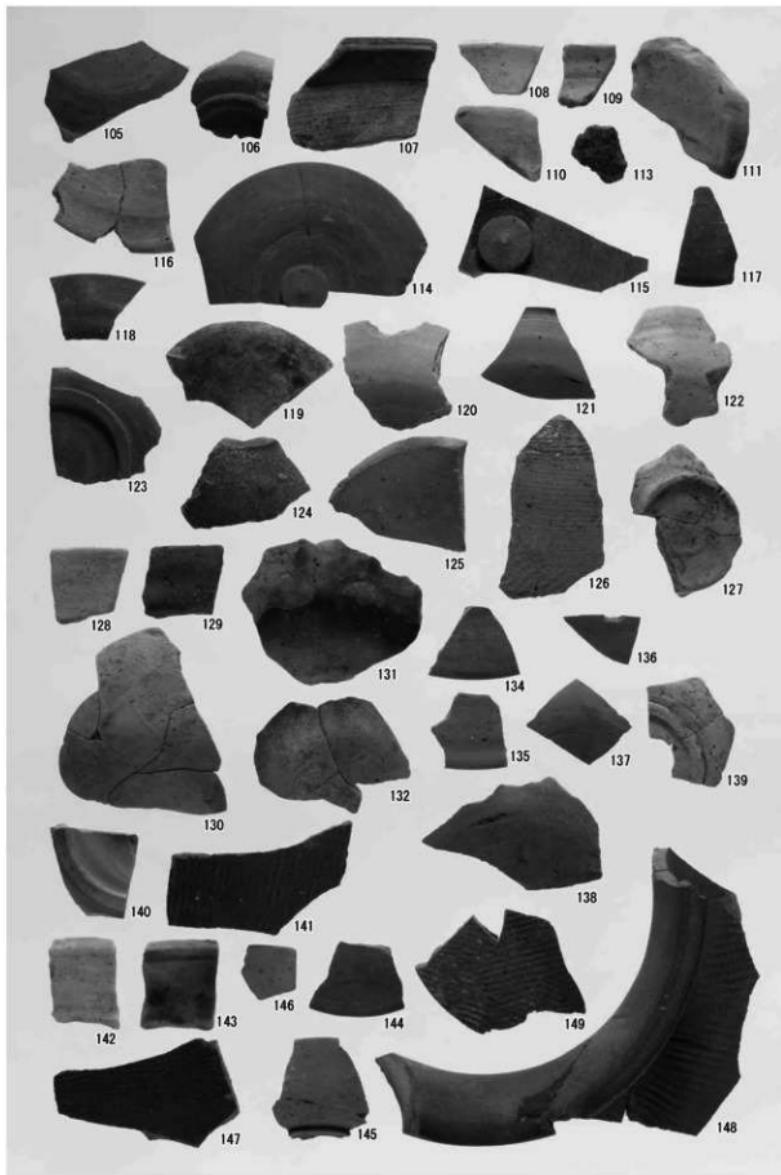
SP56・50（南西から）

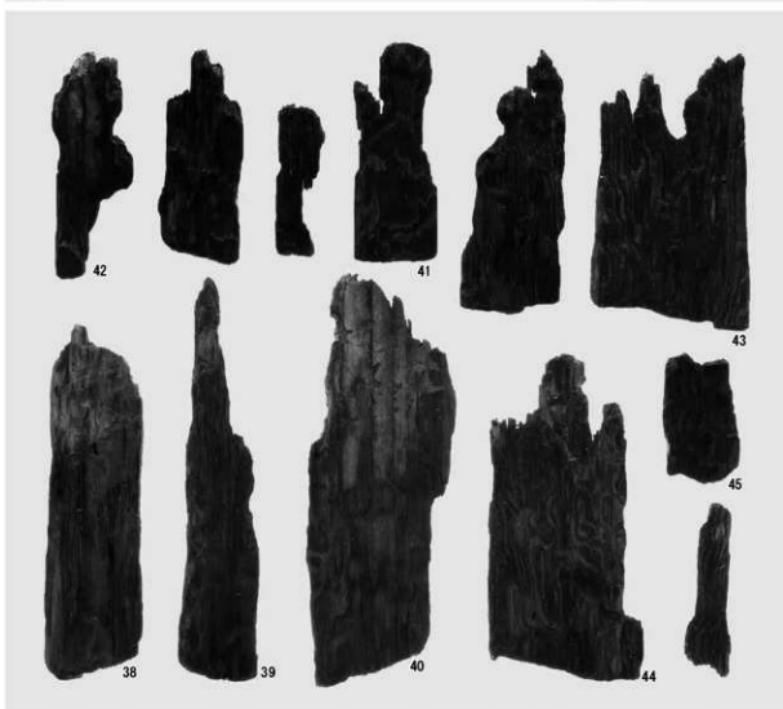


土層状況（北東から）









報告書抄録

富山市埋蔵文化財調査報告 98

富山市内遺跡発掘調査概要 21

—友坂遺跡—

2019年3月29日 発行

発 行 富山市教育委員会

編 集 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒939-2798 富山県富山市婦中町速星 754

TEL:076-465-2146 FAX:076-465-5032

E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印 刷 中央印刷株式会社